



多賀城から、

だれも取り残さない地域を目指し、

持続可能な関係性を探るための報告書 Vol.3

2020.4～2023.3

もくじ

1. TSRが目指すところ	2
2. 事業の目的とプロセス	3
3. Tagajo Sustainable Relationship2020 会議 議事録	4 -11
ゲストトーク 「持続可能な地域のつくり方」	
テーブルトーク「6つの地域課題を考える」	
4. Tagajo Sustainable Relationship2021 会議 議事録	12-21
基調講演 「転勤族はマイノリティか」	
テーブルトーク「防災とインクルーシブなまち」	
アイデア出しグループセッション	
5. 実践編	
1) 防災	
①多賀城の防災の取り組み	22-27
②多賀城の子ども防災 2021	28-29
③多賀城の子ども防災 2022	30-31
2) 多賀城の多文化共生 2020～2021	32-35
6. データでみる多賀城市	36-41

多賀城市の基本データ

宮城県の東部太平洋岸に近く、土地はおおむね平坦で、東南に向かって平野が開け、仙台湾に面し工場地帯を形成している。東北部は丘陵性の高台で住宅地になっており、西南部を七北田川、中心部を砂押川が東西に貫流し、ともに仙台湾に注いでいる。仙台港背後地を中心とした工場地帯で電機、金属、食料品を中心とした製造業が主軸となり、卸・小売業やサービス業を中心とした第3次産業で構成されている。



人口：62,416人
外国人：521人
世帯数：27,219世帯
人口密度：3,169人/km²
主な通勤先：仙台市（42.8%）

※令和元年12月31日時点

宮城県市町村振興協会が発行している『市町村概要みやぎの令和2年度版』より

1. TSRが目指すところ

人口減少、少子高齢化が進む中、生活様式も多様化し、地域や社会の課題は複雑化しています。そこに起こった、2011年の東日本大震災、2020年からの新型コロナウイルス感染拡大は、私たちの暮らしに大きな影響を及ぼしました。

以前より情報はより得やすくなり、課題解決の取り組みや専門性が進んでいる今、暮らしやすいまちに近づくためには何が必要なのでしょう。

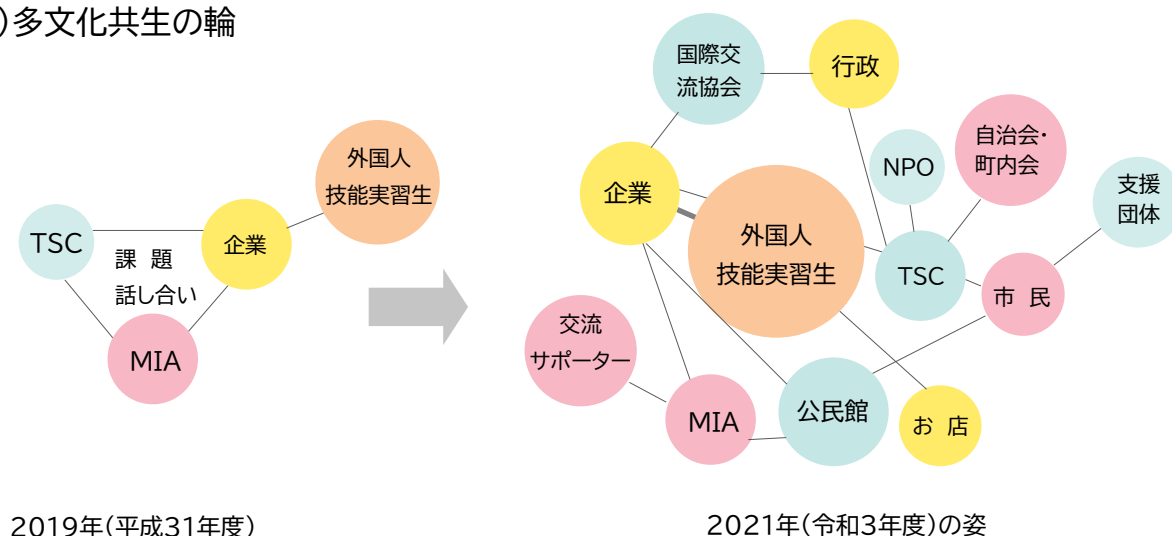
社会の変化の中で、多賀城市民活動サポートセンターは、地域のさまざまな団体・機関が連携し、地域課題の解決や、地域の魅力を高めることがますます重要だと考え、2017年度よりTagajo Sustainable Relationship (TSR) 【多賀城から、持続可能な関係性を探る】を掲げ、取り組みを進めています。

2018年度からは、地域や社会に共通するテーマ（課題）を「だれも取り残さない地域・社会を目指す」と定め、見えにくい課題や当事者の声を共有する場を積み重ねてきました。その中から共通点を見出したり、アイデアを出し合い、課題解決に向けた実践につなげてきました。実践においては、一過性ではなく、主体性を育み、持続できる姿を描きながら、コーディネートやサポートを進めてきました。多文化共生、防災の取り組みは、最初は小さな連携から始まり、少しずつ関わる団体・機関を増やしたり、新たな人材を発掘し、課題解決へ向けての取り組みの輪を広げています。

本書は2020年度から2022年度までの、市民のみなさんと取り組んできた事業をまとめたものです。市民の想いやアイデア、想像力が散りばめられた本書は、地域の課題解決やより暮らしやすいまちへのヒントが込められています。たくさんの人に手に取っていただければ幸いです。

そして、これからも当センターは市民活動団体、自治会・町内会、市民、企業、行政等の多様な主体のみなさんと一緒に、対話と実践を重ねていき、だれも取り残さない地域づくりに取り組んで参ります。

(例)多文化共生の輪



2. 事業の目的とプロセス

process1 調査・ヒアリング、報告会【報告書Vol.1参照】

目的：団体・組織へのアンケートとヒアリングを通して地域や社会のことを知る。

概要：アンケート・ヒアリング調査

実施日：2017年10月10日(火)～12月10日(日) 回答：38社/171社に配布

シンポジウム「TSR（多賀城から、持続可能な関係性を探る）会議」/報告会

実施日：2018年3月12日(月)

process2 地域・社会貢献活動の取材と情報発信、相談支援

目的：企業の地域貢献活動を発信することで、市民が企業の取り組む地域づくりの活動を知る機会をつくる。

社会貢献活動相談を通して、企業の持つ資源を地域づくりに活用する。

概要：多賀城市内企業の地域貢献活動の取材と発信：2件

多賀城市内企業の地域・社会貢献活動相談：6社（企業の協議会含む）

process3 調査内容を丁寧に分析して課題をさぐり、目指すまちの姿を描く

目的：さまざまな主体に共通し、また目指すべき地域や社会の姿としての課題をあげる。

概要：団体・組織の悩みや困りごとを選び出し、関連する項目ごとにまとめ、共通する内容をつなげる。

process4 さまざまな主体が集まり関係性を構築する場を作る

目的：「だれも取り残さない地域を目指して」をテーマに、その実現を参加者全員で考えるとともに参加者同士の関係性構築を目指す。

概要：「TSR会議 Vol.2 障害者雇用を考える」実施日：2019年1月22日(火)

「TSR2020会議 ユニバーサルなまちを考える」実施日：2021年1月22日(金)

「TSR2021会議 防災とインクルーシブなまちを考える」実施日：2021年9月25日(土)

process5 小規模な実践を通してテーマを深掘りする

目的：process4の参加者の考えや声を参考に、勉強会や体験会など小規模な取り組みを行い、課題をより深く知る。

また、関連するさまざまな主体が集まって知る機会をつくり出す。

概要：1) 当事者の“日常”を知り体験する「みんなにやさしいユニバーサルまちあるきツアーズ Vol.1

～外国人とあやめまつりに行って、日本文化を体験するツアー～」実施日：2019年6月16日(日)

2) 当事者の“日常”を知り体験する「みんなにやさしいユニバーサルまちあるきツアーズ Vol.2

～車いすでバスに乗って、菖蒲田浜へ行って、フェスを見学するツアー～」実施日：2019年9月13日(金)

3) 支援団体と共催実施「多賀城のはたらく外国人 ～外国人技能実習生について知ろう～」実施日：2019年10月19日(土)

4) 体験する「水辺の防災S U P体験&ミニ防災まちあるき」実施日：2021年10月31日(日)

5) みんなで考える「多賀城みんなの防災ワークショップ」実施日：2021年11月6日(土)

6) 仲間をつくる「TSR会議発ミーティング」実施日：2022年7月28日(木)

process6 実践から集まった仲間とともに課題解決のアイデアを持ち寄り実践に向かう **NEW**

目的：これまでの取り組みの中で知った課題について、実践から集まった仲間とアイデアを出し合い、実践する。

概要：1) 防災人ミーティング 実施日：2022年6月7日(火)・7月15日(金)・8月25日(木)・9月16日(金)

2) ユニバーサルな避難を考える 実施日：2022年10月13日(木)

3) アイデアの実践「ユニバーサルな避難所」実施日：2022年11月5日(土)

4) 子どものいのちを地域と連携して守る取り組み 市内保育所の避難訓練

2021 ・まめまめ保育園 実施日：2021年12月20日(月)

2022 ・桜木保育所 実施日：2022年9月13日(火) ・志引保育所 実施日：2022年10月18日(火)

・八幡保育所 実施日：2022年11月21日(月)

5) 外国人にも、誰にもやさしい地域を目指して 多賀城の多文化共生2020～2021

2020 ・外国人技能実習生交流サポーター育成講座 実施日：2020年9月26日(土)・10月3日(土)

・防災研修 実施日：2020年11月8日(日)

・日本の陶芸体験&交流会 実施日：2020年12月13日(日)

2021 ・外国人技能実習生交流サポーター育成講座 実施日：2021年7月4日(日)・7月11日(日)

・ミンガラーバミーティング 実施日：2021年7月31日(土)

・日本のお正月あそび 実施日：2022年1月10日(月・祝)

3. Tagajo Sustainable Relationship 2020 会議 議事録

「ユニバーサルなまちを考える」

2021年1月22日(金)、オンラインで開催された3回目となるTSR(多賀城から、持続可能な関係性を探る)2020会議。2019年度にアイデア出しのワークショップを企画していましたが、直前に新型コロナウイルス感染拡大のため中止となり、改めてオンラインでの当事者による課題共有を行いました。ゲストにNPO法人issue+designの寛裕介さんをお迎えし、ゲストトーク「持続可能な地域のつくり方」についてお話いただきました。

「ユニバーサルなまち」「貧困・孤立・フードロス」「発達障害」「化学物質過敏症」「LGBT・ジェンダーレス」「外国人労働者」の6つのテーマで課題共有とアイデア出しを行い、課題の見える化を行いました。

※トークの一部抜粋したものです



ゲストトーク

「持続可能な地域のつくり方」



寛さんはNPO法人issue+designを2008年に立ち上げました。社会課題、地域創生、介護福祉、まちづくりなど、さまざまな地域のプロジェクトを手掛ける中、デザインというアプローチを大切にしています。デザインはカッコ良いものをつくるという意味ではありません。「美」と「共感」と「楽しさ」を大切にし、参加したい、一緒に取り組みたいという気持ちを動かし、それぞれの行動が変わり、結果的に地域が変わっていくことを目指しています。

「人の共感を呼び、社会にシアワセなムーブメントを起こすこと」をデザインと呼んでいます。

さて、持続可能な地域とはどんな地域なのでしょう。

「地域は生きているということ」

寛さんが15年くらい地域に出向いて活動していて感じること。地域の課題の結果から、原因を探り、対処をする。例えば、経済の衰退の原因は、若者不足であるから、移住・定住促進の取り組みを行うなどという流れです。

Tagajo Sustainable Relationship (多賀城から、持続可能な関係性を探る) 2020 会議

日時：2021年1月22日(金) 13:30~16:30 ※オンライン開催

参加者：80名(企業、NPO、市民、自治会、学生等) + 市役所

対象：多賀城市内外の企業、団体、個人、行政など

ゲスト：寛 裕介さん(NPO法人issue+design代表/慶應義塾大学大学院特任教授)

テーマ：「ユニバーサルなまちを考える」

- | | |
|---------------|--|
| ①ユニバーサルなまち | 多賀城視覚障害者福祉協会 会長 佐藤 広一さん |
| ②貧困・孤立・フードロス | NPO法人いのちのパン 理事長 大友 幸証さん
NPO法人アスイク 紺野 風牙さん |
| ③発達障害 | ハッピーピース 代表 本郷 佳江さん |
| ④化学物質過敏症 | コトリじかん。 庄司 良博さん |
| ⑤LGBT・ジェンダーレス | てんでん宮城 佐藤 夏色さん |
| ⑥外国人労働者 | 大代地区コミュニティ推進協議会 高橋 秀秋さん
公益財団法人宮城県国際化協会(MIA) 大泉 貴広さん |



しかし、それぞれ個別の課題の対処では根本的な解決にはならず、ずっと対処を繰り返して衰退していくということが日本各地で行われています。

人と経済がつながっていない。地域にいろいろな分断がある。人と生態系を再生するためにどうしたらよいか、そこにSDGsのアプローチが有効です。SDGsとは国連で採択された2030年までに地球を変えていこうという共通目標です。世界はつながっているというメッセージがあります。SDGsに取り組むときは、関係性を考えながら取り組まないと問題の解決はしません。地域が抱える問題はすべてつながっているのです。

負のスパイラルを正の循環に変えていくこと。全ての問題に全方的に取り組む包括的なアプローチが必要になってきます。そのため、分断を乗り越え、包括的に取り組むための対話と協働が必要になってきます。

持続可能な地域をつくるために必要なことが4つあります。

1. つながり協働し 高めあう「地域コミュニティ」
2. 道を照らしみんなを導く「未来ビジョン」
3. 市民一人ひとりが協働しつながる「チャレンジ」
4. 未来を切り拓く力を育む「次世代教育」

本質として地域の抱える課題は根っこで全てつながっています。つながっていることを意識しながら包括的にアプローチしていく。包括的なアプローチのためには、それぞれのプレイヤーが分断を乗り越えて対話と協働のスタンスに変えていく必要があります。

寛 裕介 (かけいゆうすけ)

NPO法人 issue+design代表/
慶應義塾大学大学院特任教授



1975年生まれ。2008年ソーシャルデザインプロジェクトissue+design を設立。以降、社会課題解決のためのデザイン領域の研究、実践に取り組む。代表プロジェクトに、東日本大震災のボランティアを支援する「できますゼッケン」妊娠・出産・育児を支える「親子健康手帳」300人の地域住民とともに未来を描く「みんなでつくる総合計画」認知症とともにより良く生きる未来をつくる「認知症未来共創ハブ」他。GOOD DESIGN AWARD 2019 BEST100「SDGs de地方創生」カードゲーム開発者。日本計画行政学会学会奨励賞、グッドデザイン賞、D&AD(英)他受賞多数。著書に『ソーシャルデザイン実践ガイド』『人口減少×デザイン』『地域を変えるデザイン』『持続可能な地域のつくりかた』など

テーブルトーク「6つの地域課題を考える」

テーマ① 「ユニバーサルなまち」

わたしたちが暮らすまちは、障害がある人にとってもない人にとっても暮らしやすいまちでしょうか。障害があることで暮らしにくさを感じたり、差別があったりしないのでしょうか。障害がある人のことを障害がある人に聞かずに考えていませんか。ご自身も視覚障害者である多賀城視覚障害者福祉協会の佐藤広一さんに話を伺いました。

— 多賀城視覚障害者福祉協会はどんな活動をしていますか？

佐藤「多賀城市と七ヶ浜町の障害者手帳を持っている人で構成しています。IT機器の講習や体を動かすことが少ないので音が出るスポーツ、歩行、旅行会などもしています。視覚障害者の生活の場で、必要なことを一緒に学ぶ活動をしています」

— みなさんに知ってほしいこと、困りごとを教えてください。

佐藤「白杖をついて歩いている姿を見るだけでは、行動が制限されることの意味がわからないと思います。視覚障害者は情報障害です。人は8割が視覚的に情報を得ていますが、そこを私たちは得ることができません。みなさんもどのように私たちに働きかけたらよいかかわからないと思います。まず出会ったら声をかけてほしいと思います」

— 声のかけ方でみなさんが暮らしやすいまちになりますね。

佐藤「〈あちら〉と言われてもどちらかわからないし、一度触って確認できないと状況把握ができません。店に買い物に行っても、欲しい物がどこにあるかわかりません」



多賀城視覚障害者福祉協会（右上）

会長 佐藤 広一（純漢方鍼灸接骨院院長）

1982年(昭和57年)4月に協会設立。多賀城市・七ヶ浜町に居住する身体障害者手帳を有する視覚障害者(本会員)及び会運営に賛同する賛助会員で構成されている。視覚障害者の文化の向上・福祉の推進・親睦・情報交換のため、インドアのスポーツ体験や視覚障害者に係るIT機器講習会などを行っている。

— 情報の発信の仕方、表現の仕方、情報の伝え方など参考になる事例はありますか？

寛「視覚障害のプロジェクトはやっていませんが、認知症の方のプロジェクトを行っています。どういう状況でどう困っているか周囲がわからないのが課題です。どう困るかをきちんと伝えていくかが、この領域では大切であると感じています」

— 佐藤さんは視覚障害者の声を集めて届ける活動もしていると聞かれています。

佐藤「IT時代で健常者はどんどん便利になっていますが、私たち視覚障害者はタッチパネルでATM、券売機が使えなくなっています。私たちは少数派であるので、要望を伝えると何人が利用しますかと言われることがあります。良かれと思って作られたものが、障害者にとっては圧倒的に使えないものも多いです。障害者の基準に合わせることも必要だと感じます」

— 認知症の方のサポートの仕方との共通点。少数派の人たちの声の届け方のヒントはありますか？

寛「認知症の領域で、インフラを担う企業がインフラを整えているようで、不便を感じている人も多いです。企業が障害のある人の視点で考えることは、健常者にとっても便利になると思います。このような考え方に变えていくことで、より多くの一般の方にもプラスになると思います」

佐藤「私たちも働きかけをしているが、障害者のことを決めるときに障害者抜きで決めないでほしいです」

— 基本的なこととして、使う立場の人の声を聞くことが大切だと思いました。ありがとうございました。

■ユニバーサルなまちについての参加者の感想

- ・視覚障害者にとっての今の便利さは不便さへ向かっているという内容の話を聞いて、私自身便利さに慣れて障害のある方への配慮を忘れていたことを反省しました。
- ・障害や病気など、生活する上で生きづらさを抱えている人々の苦悩や思いを聴くことができました。どのテーマも地域との連携が重要であり、より多くの住民に対して障害や地域課題についての認知度を向上させていくことが大事であると感じました。

- ・「見かけたら声を掛けて手伝って欲しい」と聞けたのが良かった。どうしたらいいか分からないという人もいると思うし、自分もこれからは声を掛けようと思った。
- ・少数派になってしまう人たちの困り感に寄り添うことはこれからの世の中にとって大切で、私たちの生活ももっと良くなる可能性を秘めていると感じました。
- ・困りごとを訴える人の数は少なくとも、結局は多くの人の利益になりえるということ。
- ・人の情報の80%が視覚から得るものであるということ。

テーマ②「貧困・孤立・フードロス」

日本では大量の食料が捨てられている一方で、日々の食べるものに困っている人たちがいます。コロナ禍で失職して、困窮する人が増加しているとの報道も見聞します。みなさんも食料が余って廃棄することはありませんか。困っていることを周りに伝えることを恥ずかしいと思うことはありませんか。フードバンクの活動について多賀城市で貧困者支援の活動をしているNPO法人いのちのパンの太友幸証さんとNPO法人アスイクの紺野風牙さんのお二人に話を伺いました。

— いのちのパンはどのような活動をしていますか？

太友「NPO法人いのちのパンは、フードバンクと言って、食べ物を集めて貧困者に届ける活動をしています。訳があって売れなくなったものなどです。食料は約200人に届けています。1割の人は本当に困っている人たちのので、そこには不足な物品を購入して届けています。震災支援を通してフードバンクを始めました。人々とのつながりを絶たないように10年届けることを続けています。現在支援している人は高齢の人も多く、被災した人も多く含まれています。震災でできた支援のつながりを大切にしつつ、そこから活動をフードバンクの活動にシフトしました。現在は個人宅のほか、こども食堂、育児院、福祉施設、地域包括支援センターなどにも食料を届けています」

— 活動の中で知ってほしい地域の現状は？

太友「これまで活動していて、困っている人達がどこにいいのか、わからないことが多かったです。今回、コロナ禍で失業した人、減収した人に食料を届けるプロジェクトを行い、これまでより貧困の現状を知ることになりました。今、行政との連携なども含め、いろいろな機関、企業との連携も欠かせない活動と感じています」

NPO法人いのちのパン 理事長 太友 幸証（次ページ写真右下）

2011年5月に発足した大震災復興支援団体ホープみやぎのフードバンク事業部門を「NPOいのちのパン」とし2015年4月設立。キリスト教精神に基づき、社会の中で恵まれない環境にある方に対して、生活支援と定期的な交流に関する事業を通し、生活の向上に向けた励ましを行い、明るく豊かな社会の実現に寄与することを目的とし活動。食べ物と一緒にこころも一緒に運ぶフードバンクNPO。

— 次に、アスイクの活動について教えてください。

紺野「コロナ禍前は学習支援とこども食堂を行っていましたが、今は時間を区切った個別面談と食料のお渡しをしています。アスイクは震災をきっかけに立ち上がった団体です」

— どんな人が参加していますか？

紺野「アスイクには対象世帯があります。生活保護、児童扶養手当を受給している人等を対象としています。現在は10世帯が参加しています。支援をする中で感じることは、助け合いや人に頼ることが恥ずかしいと、負い目を感じている人が多いということです。受けることができる社会的制度を知らないことが多いです。どういう制度を利用できるかを知る方法を知らないと感じます」

— 活用できる支援を当事者が知らないという課題がありますね。アスイクの活動を通して、こういう社会になったらよいなど、目指す姿を教えてください。

紺野「多賀城こども食堂は事業の一つで、アスイクでは子どもの貧困にアプローチするために、学習支援や保育園、フリースクールなどの活動も行っています。目指すべき社会の姿はSDGsのメインスローガンである〈誰も取り残さない社会の実現〉です。困っている子どもや親の味方がたくさんいる社会を築いていきたいと思っています。社会というが大きくなってしまっているので、考えに賛同してくれる関係機関や行政とつながって、できることを広げていきたいと思っています。貧困で選択肢が減ることがなくなり、悲しいことが減ることが、目指すべきゴールにつながるのかなと思っています」

寛「食料を支援されるのに遠慮してしまう、自分が助けてほしいということを公にできないこと。障害や疾病で声を上げられないこと。声を上げやすくするのは大切なポイントだと思います」

紺野「支援されることに周りの目が気になるということがあるようです。周りの目を気にしている。恥ずかしいことではないことを伝えていますが、根底に助けられているという思いがあるようです」

寛「いかに共感しあえるか、個人的に課題はないが、自分もいつ何時職を失うか、障害をもつ可能性もあることを受け入れて、助けることもあれば助けてもらうこともあるという考えに社会が変わっていくことができればと思っています」

大友「する側される側という分断。すべてがつながっている、コミュニティが生きているというのは興味深いと感じました。経済支援をすれば解決するものではないことを実感しています。助け合いのなかで生まれてくるものだと思います。障害からの貧困もあるのを目の当たりにしています。お互い様だからという考えが大切だと感じました」



NPO法人アスイク 紺野 風牙（右上）

NPO法人アスイクは、2011年3月28日東日本大震災直後に、任意団体として発足。避難所での学習サポートを開始。子どもの貧困・不登校の問題に対し自治体と協働し子どもたちへの学習・居場所サポートや保護者相談などを行っている。またフードバンク「プラス」では、ひとり親家庭などへ食品や不用になった家電・制服などを届けている。2016年6月、多賀城市にこども食堂を開設。食事だけでなく、温かくてほっとする居場所を提供。困っている子どもや親の見方がたくさんいる社会を目指す。

■貧困・孤立・フードロスについての参加者の感想

- ・多賀城市社会福祉協議会で今月から始めたフードドライブと関連する皆さんの近況を聞けて良かった。
- ・こども食堂の存在、活動内容を教育や福祉分野ではない方へもお伝えすることが出来た。
- ・あまり深く考えた事がなかった事をあらためて具体的に考えさせられました。
- ・すべての課題に共通する事ですが、昔よく使った「お互い様」をあらためて思い出しました。
- ・現在のこども食堂定例会だけでなく、他分野とも連携した横の繋がりを作っていきたいです。
- ・制度はあるが当事者が知らないという状態が改善されることを望みます。

- ・地元における具体的な問題と、地道な活動状況を知ることができた。
- ・6つのテーマの団体での共通点を探して、協力して行政に提案など出来たらいいと思った。地域との繋がり方の問題点も、もっと話したい。
- ・子ども支援に関心があり、子ども食堂への食料提供を行ってききましたが、今後はもう少し支援の幅を広げていきたいと考えております。いのちのパン大友さんやアスイク紺野さんのお話は大変参考になりました。
- ・地域のニーズを整理し、企業として新たに何かできるかを模索したいと思います。

テーマ③ 「発達障害」

発達障害がある人に会ったことはありますか。発達障害がある人に会ったとき、自分が我慢しないといけない、相手に合わせないといけないと思ったり、なんでこんな行動をとるのだろう、なんで理解できないのだろうといらいらすることはありますか。発達障害児と家族の「あったらいいな」を支援しているハッピーピースの本郷佳江さんに話を伺いました。

ー 発達障害とは？ どんな活動をしていますか？

本郷「発達障害とはコミュニケーションが苦手とか、いろいろなイメージがあると思います。発達障害の困り感って脳の機能の問題なので、イメージがわからない人が多いです。10人いれば10通りの困り感があるんです。聴覚よりも視覚情報が得意なのも特徴です。目で見て情報を理解することが多いのですが、日常のコミュニケーションは言葉が多いため、ずれてきます。しつけややる気の問題と誤解されやすいので、その誤解が取り除かれたらよいと思います。発達障害の人との接し方がわからない人も多いので支援者向けの勉強会も開催しています」

ー 困りごととは人それぞれ違うし、理解されず誤解されることも多いのですね。

本郷「周りをみて判断して動けと教えられますが、発達障害の子どもは細部にこだわるので判断できません。時間と空間の組み立てができない、子どもの問題とみられるが脳の機能障害なんです。そういうポイントやコツを知れば、子育てしやすくなるので、そこを伝えていけばいいなと思います」

ー 発達障害の人に合わせて誰かが我慢するといのも違うとお話しましたね。

本郷「そうですね。発達障害の人に配慮するのに、誰かが我慢することがないようにと思います。発達障害の人にわかりやすい環境を作ることは、私たちにとっても使いやすくなる環境になると思います。少数の人が困っている点は、より使いやすくなるヒントがある。脳の認知がわかりやすい多数派の健常者が我慢するのではなく、より分かりやすいものになっていけばと思っています」

寛「日本の画一的な教育の状況で生きづらいと感じている。発達障害を含めて、人の個性や多様性を認めにくい社会で、その原点は学校にあるのだと思う。コロナ禍の状況でこれまでの決まった方法が役に立たなくなってきた。そしてこれからも変わっていくと思う。いろんな視点を持った人が必要になってきます。原点の教育、子どもたちを受け入れることが必要だと思っています」

本郷「発達障害の困り感って大なり小なりあります。知ってもらうことが大切だと思っています」



ハッピーピース 代表 本郷 佳江（右上）

ハッピーピースは、発達に凸凹を抱える子どもを育てる保護者が欲しい情報・あったらいいなというサービスを、それぞれのできる事、強みを生かしながら形にしていきたい！という想いから活動を開始。凸凹が無限の可能性に変わる学び、育て辛さが感動に変わる仲間作り、人との違いが喜びに変わる居場所づくりを目的とし、保護者も子どもも、責められない追い詰められない非難されない居場所づくりを提供している。

■発達障害についての参加者の感想

- ・当事者や家族、支援者だけがその分野に詳しくて、そうでない方がその分野について知る機会がない、興味が無い」という書き込みにハッとさせられました。知ってもらうことの必要性、重要性を感じました。
- ・地域の課題に今まで興味がなかった人たちにも、今回のワークショップのように対策案を考える機会を与える事で、誰しもが生活しやすい地域になっていくと思いました。
- ・障害分野で事業所の立ち上げにかかわっているが、包括的な視点、横のつながりをより意識していきたいと思った。

- ・発達障害に関して、自分の子が発達障害かとも思っても、どこに支援を求めていいかわからない。行政に頼るのも一つの方法ですが、それでは行政がパンクしてしまいそう。幼稚園や学校が窓口になったり、発達障害の子どもへの接し方など、実際にクラスや学校の中で生活しながら先生や子どもたちが共に考え学んでいく環境があると良いと思いました。
- ・とにかく、多種多様な人との関わりが大切だと思いました。自分を知ってもらうことと、相手を知ろうとすることはセットで考えようと思いました。

テーマ④「化学物質過敏症」

化学物質過敏症ということばを聞いたことがある人もいないのではないのでしょうか。柔軟剤などに代表される香害に悩まされ、日常生活が送れない人がいる中、スーパーや薬局では当たり前のように柔軟剤が並び消費されています。個人に使用の選択の自由がある「香り」について、私たちはどのように考え、対応することができるのでしょうか。化学物質過敏症の人とともに寄り添う活動を目指しているコトリじかん。の庄司良博さんに話を伺いました。

ー化学物質過敏症とはどのような病気ですか？

庄司「化学物質過敏症は普通の人が使っているごく微量の化学物質に過敏に反応し、体調不良になる病気です。引き起こす大きな原因として香りの害という香害が挙げられます。社会問題にもなっています。香害を引き起こすものは柔軟剤、香り付き洗剤、消臭除菌剤、農薬など様々です。香害が原因で化学物質過敏症になる人が多いです。日常的に柔軟剤などの物質を体内に取り込んだ時、微量でも適応能力を超えると発症します。はじめのうちは排出できても蓄積され、体内に取り込んでしまいます。解毒能力は個人差があるので、同じ環境でも発症する人とならない人がいます。2009年に厚生労働省に病名登録されましたが、社会的認知が進んでいないのが現状です」

ー症状も個人差があるのですか？

庄司「症状も個人差があり、私だと化学物質、人工的な香料が体にはいると、頭痛、吐き気、目のかすみ、倦怠感などがあります。とても影響があります」

ー目に見えないものなので理解されていないという思いがある。コトリじかん。が活動を通して目指している地域の姿を教えてください。

庄司「化学物質過敏症および、原因となっている香害で悩んでいる人がたくさんいて、電話やメールがたくさん届きます。認知度が低い病気なので、家族や職場で孤立し、学校にも通えない人もいます。孤独、孤立に悩む患者が多く、周囲の誰にも相談ができず、自分のつらさを伝えることができない人が多いです。私たちの活動としては、患者さんや苦しむ人がどういったことに悩んでいるのか、何で体調を崩しているのか、解決の方法を一緒に考えたり、発症してしまった人の改善の情報をシェアしたり、孤独を解消していければと思っています。理解を得られるにはどうしたらよいのかということをとともに考えたり、化学物質を取り入れないためにどうしたらよいか、孤独、孤立を解消するために、日常の会話から話す場をつくり、交流をしつつ、お互い学ぶことになればと思います。その場をつくらうと思っていたが、コロナ禍で対面でできなかったです。1年間はSNSやメール、電話で活動してきました」

ー化学物質過敏症を知ってもらい、困っている方の相談にのる活動をしているんですね。

寛「高知県の佐川町で、化学物質過敏症の子どもが保育園に通えなくなり、机といすを完全化学物質フリーにするため、まちな木の木材をつかって作ることをお手伝いしたことがあります。



コトリじかん。 庄司 良博（右上）

化学物質過敏症（CS）の影響もあり市内で経営していたカフェを閉店。CSの理解をしてもらえず、同様に悩み苦しむ人が多いことを知り、情報交換や悩みを話せる場をつくるため2020年にコトリじかん。の活動を開始。CSによる体調不良で困っている人が孤立しないよう安心して会える人と場をつくることを目指している。香害で悩んでいる人の居場所づくり、情報交換の場をつくる、想いを受け取り代わりにSNSなどで発信している。

※香害 香水や合成洗剤・柔軟剤などに含まれる合成香料に起因し、頭痛やアレルギーなどの症状が誘発される、化学物質過敏症を生じること。

我々はいろいろな過程で化学物質を使っています。我々がいかに化学物質に囲まれて生活しているのかを実感させられました。現実的に日常生活を行っていくために、どんなことが必要なのでしょう」

庄司「私たちは対面することが苦手です。今みなさんが普通に使っているものを使っている人と出会うと、具合が悪くなります。使う人の権利なので否定はしませんが、大変難しい話です。ですが、洗剤は無香料で洗濯してほしいです」

ー少しでも化学物質を無くすことは、地球にもやさしいことだと思います。

寛「たしかに個人の自由な選択ではありますが、社会全体がより気候変動という大きな問題に取り組む中、いかに化学的なものから脱却していくかというのがこれからの大きな課題であるので、最前線でまさに体験しているみなさんの話を聞いてみたいと思いました」

■化学物質過敏症についての参加者の感想

- ・恐怖心ではなく、ポジティブな面で伝えたい。自然のものを使えば、水もきれいになるとか。
- ・化学物質過敏症は、日常生活でも、単なるわがままと捉えられ、なかなか理解してもらおうが大変です。病院ですら理解してもらえないことが多い。
- ・学校だと、教室から逃げるわけにはいかないので、困っている子どもたちがたくさんいると思う。
- ・香りに関しては好みやこだわりもさまざまで、商品も多様化しているので周りに理解してもらうには、やはり公に広く知ってもらうことが必要ですね。メディアが大きく何度も発信してくれることを望みます。

- ・柔軟剤の香りが苦痛という子に、個別対応で学習指導を行ったことがあります。本人がいつも申し訳なさそうにしていることに違和感を覚えていました。今一度知ること、実践することの大切さを感じました。
- ・困りごとを伝えることが相手を否定しないか迷うことも理解できます。でも声に出すことで理解できることもあります。
- ・声をあげなくても理解と支援が当たり前なまちだと住みやすい。
- ・当事者以外の人たちが、学びの必要性を感じるのが大事。
- ・まだ起こっていないことに対して真剣に考えることや行動を起こすことは工夫が必要だと思います。

テーマ⑤「LGBT・ジェンダーレス」

LGBTや「男だから、女だから」という性別による偏見をなくするというジェンダーレスということばを聞くことも増えてきたのではないのでしょうか。性別に関する考えなどは世代によってギャップがあることも多いと思いますが、自分たちの世代の当たり前を当たり前と思わないことが大切です。LGBTに関する活動をしているてんでん宮城の佐藤夏色さんに話を伺いました。

— どのような活動をしていますか？

佐藤「LGBTに関する活動をしています。性的少数派の活動です。活動をはじめて8年になります。行政に働きかけたり、交流会をしたりしてきました」

— どんなことを働きかけてきましたか。

佐藤「申込書の男女欄が記入しにくいと思いました。自分は女性として生まれたが、女性と思ったことはありません。男女欄に記入することも嫌でした」

— 働きかけてどんな状況になりましたか。

佐藤「思ったより、理解してもらえなかったなと思いました。議員や行政には理解してもらえたことはあるが、まち全体には理解してもらえていないと感じています」

— 女性だから、男性だからという見られ方は課題にもなっていますね。

佐藤「LGBTとくられるのは好きじゃないです。男性、女性を押し付けられるのが嫌だと思います。震災後、自衛隊がお風呂を設置してくれましたが、自分は一度も入らなかったです。それは障害のある人などほかの人の困りごととリンクすることも多いと思います」

寛「人それぞれいろんな問題を抱えています。人とは違うコンプレックスを抱えているという性別の問題はわかりやすく、つきつけられる問題だと思います。いろいろな課題と共通のところもあると思います。ほかの人の痛みに共感できると、いろいろな問題が一気に解決できるのだと思います」

■LGBTについての参加者の感想

- ・相手の痛みを想像することの難しさと必要性を感じました。
- ・性の問題で悩んでおられる方々が存在することを知り、認識し、自分のできることを探していきたいと思いました。
- ・現実社会では性差は必ず存在しているので、その差がネガティブではなく、ポジティブに捉えられていく社会作りが必要なのではないかと考えさせられました。
- ・声をあげる必要のない社会。「嫌な事を活動にしている」と言う言葉が心に残りました。
- ・どのテーマでも、少数派になってしまう人たちの困り感に寄り添うことはこれからの世の中にとって大切で、私たちの生活ももっと良くなる可能性を秘めていると感じました。
- ・LGBTには色々なパターンがあり社会から理解されるまでには、時間が掛かるのだろうと感じた。
- ・当事者の方が発表されたとき、「自分が困っていることを、当事者として活動するのは辛い」「当事者が活動しなければいけない世の中は優しくない」と話していたのが印象に残りました。



てんでん宮城 佐藤 夏色

東日本大震災で、性的マイノリティの生きづらさや支援の困難さを感じた。自分達の事は自分達でやらなければならないと思い、性的マイノリティや多様な性を生きる人々の生きづらさ解消を目的とし2013年に活動を開始。当事者同士の交流の場の提供・社会への提言を進めている。誰かを守るため、自分を守るため、それぞれの生きやすさを見つけられるよう活動している。

テーマ⑥「外国人労働者」

近年、わたしたちが暮らす多賀城でも外国人労働者を見かけることが増えてきました。どこの国の人で、多賀城で何をしているのか、わたしたちは知らないことも多いのではないのでしょうか。わたしたちの生活は外国人労働者抜きでは考えられません。今後も増えていくであろう外国人労働者とわたしたちはどのように付き合っていけばよいのでしょうか。外国人労働者と地域の多文化共生を推進している大代地区コミュニティ推進協議会の高橋秀秋さんと公益財団法人宮城県国際化協会の大泉貴広さんに話を伺いました。

ー 県内の外国人労働者の実際の状況を教えてください。

大泉「アルバイトをする留学生や食品、建設現場で働く技能実習生が多くなってきています。社会的に増えてきているが見えにくい存在、孤立している存在となっています。多賀城では大代地区に住んでいる実習生が多く、多文化共生の活動を始めている状況です」

高橋「実習生が大代地区にいるという話を聞いて、交流することが大切だと思い始めました。助け合うということにテーマをおいて、大代地区公民館を拠点に交流サポーター育成講座を他団体と連携して始めました。講座では外国人にも伝わりやすい〈やさしい日本語〉を学びました。次に、大代地区で防災研修を行いました。技能実習生、交流サポーター、町内会長、防災担当者を交えての研修となりました。地域マップで避難場所を説明したり、震災時の様子を伝えたりしました。その後、日本人と外国人の交流会と陶芸を体験しました。大代地区の取り組みは、MIA、企業、多賀城市国際交流協会、多賀城市市民活動サポートセンターなどが連携して始まった事業です」

寛「外国人の孤独の問題。大学の中でコミュニケーションに苦労して、同郷とのみの関わりになっているという話を聞いています。本質的に抱えている悩みなどはどこにあると感じていますか」

大泉「技能実習生は国の制度的に問題があります。人手不足に悩む中小企業が多い中、生活者としての受け入れを整備しないまま、外国人を連れてきているのです。労働者として人を受け入れるということではなく、この国と一緒に暮らす人として受け入れていくためにはどうしたらよいか、人口減少に取り組んでいくにはどうしたらよいかと真剣に考えなくてはいけないテーマであると思っています」



大代地区コミュニティ推進協議会 高橋 秀秋（右上）

大代地区コミュニティ推進協議会は、多賀城市の3つの公民館のうちの一つ、大代地区公民館を運営。大代地区・笠神地区の方を対象とした社会教育事業や施設の貸出しを行っている。地域子どもたちが学校の長期休暇に安心・安全に過ごせる場となる学習支援「まなびのひろば」やおおしろ子ども食堂を開催。また外国人技能実習生が暮らす大代地区で、技能実習生と地域住民との関係づくりとなる、技能実習生を交えた多文化共生の地域づくりを行っている。

公益財団法人宮城県国際化協会(MIA) 大泉 貴広（左下）

MIAは、県民の豊かな国際感覚を育み、国際交流及び協力に関する幅広い活動を促進するため、市町村及び各種国際交流団体の連絡調整や情報交換の活発化を促進し、かつ、広範な情報収集及び提供並びに援助等を行うことにより、世界に開かれた宮城を目指し、県民参加による国際交流及び協力の推進を図ることを目的に設立。増加の著しい技能実習生と地域住民との関係づくりを促進するために、市町村や市民団体と連携して、交流会等を行う多文化共生と県民主体の国際交流・協力活動を促進するための活動を行っている。

■トーク後のゲスト寛裕介さんのコメント

とても貴重な機会でした。非常に僕は驚きました。まちづくりのような現場でいろいろな人が集まる会は全国によくありますが、様々な幅広い領域のプレーヤーの方々が集い、一緒に活動する、働きかけるという取り組みは全国的に珍しいと思います。いろんな課題はつながっているし、いろいろな人の課題はつながっています。個別の課題の解決ではなく、そこを変えていくというのは、いろいろ連携しながら地域全体で変えていくことが必要です。こういう場をもって抱えている領域を越えてつながり、一緒に活動していくことはすばらしいと思いました。ぜひ続けていってほしい。またお声がけ頂ければと思います。

4. Tagajo Sustainable Relationship 2021 会議 議事録

「防災とインクルーシブなまちを考える」

4年目となるTSR(多賀城から、持続可能な関係性を探る) 2021会議。「防災とインクルーシブなまち」をテーマに、多賀城在住の学識者 J.F.モリスさんと、課題解決に向けて取り組んでいるゲストのみなさんのお話を聞きつつ、参加者のみなさんと共に、「世間でマイノリティと呼ばれる人たちってどんな人?」「すべての人がそれぞれに住みやすいまちとは?」など、深掘りして考えていきました。

多賀城高等学校災害科学科の生徒がサポーターとして参加し、ゲストのみなさんのお話を一緒に聞いて、感想や質問をする時間も設けました。生徒のみなさんは普段「災害科学」について学んでいますが、まちの声をどのように受け止めたのでしょうか。

また本編のプログラムと並行して、参加者のみなさんに随時チャット欄へ感想や質問、参加者同士で会話ができるよう書き込みをしていただきました。多様なセクターのみなさんが同じ場に集い、課題解決に向けての新たなアイデアなどが生まれる場となりました。



J.F.モリス

宮城学院女子大学名誉教授・東北大学災害科学国際研究所特任教授

オーストラリア国立大学で日本語を専攻し、1974年に東北大学文学部国史研究室(当時)に留学、1986年文学博士(日本史)を授与される。1989年から宮城学院女子短期大学国際文学科で教鞭をとり、2020年3月に同大学日本文学科定年退職。専門は、仙台藩の武家社会を中心とした近世史だが、多文化共生、オーストラリア先住民の歴史、文化遺産レスキューや災害後の被災者に対する心理社会的支援について著書・論文も多数。多賀城市在住。

※インクルーシブ (インクルーシブ)

誰一人取り残さずに、その人のニーズ・特性に応じて、集団・コミュニティ・社会に積極的に参加できるようにし、発言できるような環境を整えるという非常に広い意味で使われている。

Tagajo Sustainable Relationship (多賀城から、持続可能な関係性を探る) 2021 会議

実施日: 2021年9月25日(土) 14:00~17:00 ※オンライン開催

参加: 71名(企業、NPO、市民、自治会、学生、行政等)

テーマ: 防災とインクルーシブなまちを考える

内容: 多様なゲストと「防災」をテーマに課題を共有し、
セクターを超えたアイデア出し

ゲスト: J.F.モリスさん

(宮城学院女子大学名誉教授・東北大学災害科学国際研究所特任教授)

神 桂子さん(子どものことばの教室のび塾主宰・言語聴覚士)

トーマーリンさん、キンチョーユインさん、サーチャーソーさん

(ユニバー株式会社ソーイング事業部仙台工場 ミャンマー人技能実習生)

佐藤 美奈子さん(NPO法人筋強直性ジストロフィー患者会)

藤本 菜月さん、真部 さとみさん(一般社団法人tenten)

佐藤 夏色さん(てんでん宮城)

サポーター: 多賀城高等学校災害科学科生徒7名



「転勤族はマイノリティか」

J.F.モリスさんは、東日本大震災の直後に町内会や避難所に子どもの居場所をつくることを提案するなどの支援をしてきました。マイノリティとはどのような人たちなのでしょう。また、防災・減災を推進するために必要なこと、最近耳にすることも増えてきた「インクルージョン」について、モリスさんの話から見えてくること、わかることからわたしたちにできることは何かあるのかを考えていきます。

■マイノリティとは

マイノリティは、「少数派」という意味だが、単純に数の優劣ではなく、社会的・経済的な不利を背負っており、その不利が差別の結果でもあり、また差別を生み出す原因となる。

■転勤族はマイノリティなのか？

日本の転勤族の多くは、「日本人」で「雇用が保障されている人」であり、差別されるような不利な状況ではない人と考えられる。しかし同行する家族は、地域で頼れる友人や知り合いもおらず、学校や地域から孤立する恐れがあり、社会的な不利を背負うことになるかもしれない。マイノリティとは特別な人など自分と違う人ではなく、ちょっとした状況の変化で誰でもなりうる可能性がある人のこと。

■防災・インクルージョンと日常

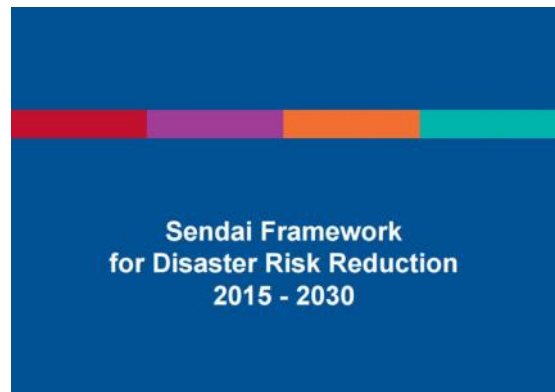
多くの災害は急に発生し、これらは元々ある外国人差別などの社会的分断や貧困などの経済的格差による被害をさらに悪化させる。そのため、災害への対応は、マイノリティへ適切な対処をするために社会的インクルージョンの実現が必要不可欠となる。社会の中の多様性と向き合い、その多様性を社会の中に取り込むこと(インクルージョン)こそ、社会的分断・経済格差、災害など社会が抱えている問題に対処するために必要。

■市民のための仙台防災枠組み2015-2030

「仙台防災枠組み2015-2030(英語版)」には、インクルーシブという言葉が多数使われており、ユニバーサルアクセス(誰にでも利用できること)を実現するキー概念として位置づけられている。また、さまざまな少数者が災害対応、復旧、復興過程から取り残されないように細心の注意を払っている。

「仙台防災枠組み2015-2030」を市民に分かりやすく解説した冊子が「市民のための仙台防災枠組み2015-2030」。仙台防災枠組みの主旨を実現するために優先すべきものとして、防災・減災の投資を進めレジリエンスを高めること、民間と政府が協力し、災害リスク削減のための準備と投資をすることとある。ハード・ソフトの両面から準備が必要だとあるが、具体例としては建造物などのハード面しか挙げられていない。ソフト面は実際にどのような取り組み・対策と

なるのか例示がない。仙台防災枠組みの背景に「心理社会的支援」という概念がある。そして、心理社会的支援を理解するためのキー概念として「レジリエンス」と「ソーシャルキャピタル」がある。レジリエンスは、ある人・組織固有の特性ではなく、その人・組織が他者と結んでいる関係の数と質によって生み出されるものである。また、ソーシャルキャピタルは3つの種類[結束型][橋渡し型][連結型]があり、[結束型]は同質性が強い集団の中で結束、[橋渡し型]は異なる集団の橋渡しをする、[連結型]は権力や財源、専門的知識や技術をもったより上位との人との関係のことである。



※仙台防災枠組み2015-2030

2015年3月に仙台で開催された第3回国連防災世界会議で、採択された内容であり、2030年までの国際的な防災指針。

■「転勤族はマイノリティか」がわたしたちに問うもの

「転勤族はマイノリティか」は誰でも社会的弱者に転落する危険性・可能性があること、平時の中にも非常時が常に潜んでいることを示す。レジリエンスは逆境・非常時に発揮されるものであるが、その土台は普段からの社会関係と活動によって育まれるものである。レジリエンスを別の角度から見ると、豊富な人間関係をもつ、個人、家族、コミュニティ、そして社会全体は問題・課題解決能力が高い。逆に同質性の高い集団・社会は、レジリエンスと社会問題の解決力が極めて脆弱になるというリスクを抱えることになる。社会の中の多様性と正面から向き合い、その多様性を社会に進んで取り組むことこそ、社会的分断・経済格差、災害など現在社会が抱えている問題に対処するために必要である。

子どものことばの教室のび塾主宰・言語聴覚士 神 桂子さん

「障害のある子どもに寄り添って」

神桂子さんは、多賀城でさまざまな障害のある子どもの言語指導や発達指導を行ってきました。東日本大震災時の記憶や声を子どもたちに寄り添ってまとめた著書「3.11あの時、そしてこれから～障がいのある子ども達も大人達も、そこにいる～」があります。神さんの東日本大震災時の想いやその時に感じた課題について聞いていきます。

ー 災害時に自分の命を守るために必要なことは？

神「障害のある人はいつでもどこでも誰かに付き添ってもらって生活しているわけではありません。一人で電車やバスに乗って支援学校に通っている人や地元の学校に登下校している人、習い事や遊びに行く人、通勤している人もいます。そのため一人にいるときに災害に合うこともあります。しかし、障害のある人は日常的に学校や通所施設とのつながりはあるが、地域の活動に参加することが少ないため、地域の人に知られていないことがあります。それでは災害時に自分の命を守ることはできません。お互いに存在を知るために、障害のある人たちも積極的に地域の活動に参加することが大切です。また、地域の人たちも地域に障害のある人たちがいるはずと思って周りを見てほしいと思っています」

ー すべての人が安心して避難できる避難所とは？

神「東日本大震災時に、怖くて声を出して走り回ってしまい、〈うるさいぞ〉と怒鳴られて避難所に居られなかった発達障害の子どもがいました。危険から逃れるための避難所なのに避難できないとはどういうことなのだろうと感じました。災害時には、障害のある子だけではなく、周囲に気づかれないさまざまな困難を抱えた人たちも避難してきます。どの人も全面介助をしてほしいのではなく、本人の困りごとを聞き、合理的配慮をしてもらえると良いと思います。怖い思いをして避難してきた人たちが、安心して一時を過ごす避難所が必要であると思います」



子どものことばの教室のび塾主宰・言語聴覚士 神 桂子(左上)

1953年、福島県福島市生まれ。福島県立福島女子高等学校卒業。法政大学通信教育課程文学部日本文学科卒業。千葉県沼南町立手賀中学校退職。千葉大学教育学部臨時言語障害教員養成課程修了。多賀城で子どものことばの教室のび塾を開設。言語聴覚士。

ー 地域の中で障害のある人とどのような方法で関わるのがよいのでしょうか？

神「一番は直接関わることだと思います。障害のある人たちは、地域の行事などには、〈子どもが騒ぐ〉〈周りに迷惑をかける〉などの理由で参加しないことが多いですが、〈騒いでもいい〉〈困りごとを知る〉〈どう助けられることができるか〉など、日常生活の中で直接関わることで、互いに理解することが大事だと思います。まずは、挨拶から始めてみるとよいかもしれません」

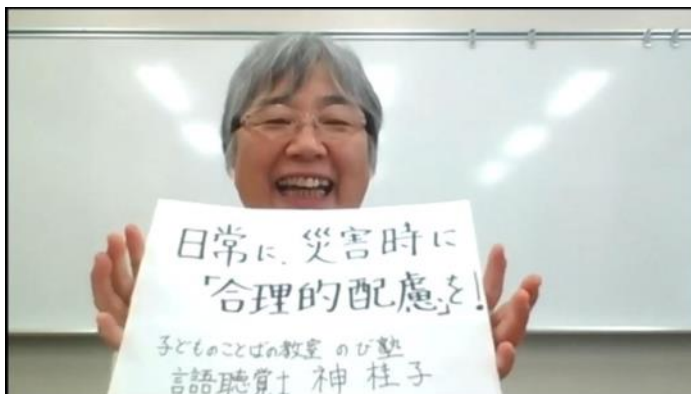
災害時に大事なキーワード

「日常に、災害時に合理的配慮を」

神「日常の人との関係や計画が非常時につながっています。障害のある子どもも守られるだけの存在ではありません。東日本大震災のときも水くみや買い物などお手伝いを頑張っていました。みんなそれなりのことができていて、それなりの力を合わせて災害という非常時を乗り越えていくことが大切だと思いました」

神桂子著書 2019年出版

「3.11あの時、そしてこれから～障がいのある子ども達も大人達も、そこにいる～」
当センターでも閲覧できる



ー 日常の備えが大事だということですね。神さんは、障害のある人に「自分から伝えるように」と伝えているのはなぜでしょうか？

神「東日本大震災時に、障害のある子どもたちは精神的不安を持ちましたが、日常から〈避難するってどういうことか〉〈避難はどこに行けばいいのか〉を説明したり、実際に避難所まで行ってみたりなどの体験をすることで、状況を掴むことができます。日常から、家族や学校、通所施設などで話すことが大切だと思います。災害時に家族や知人が助けてくれるのを待っていたのでは命が危ない。言葉で伝えられないときは〈困ったカード〉を持っていたら、近くにいる人が助けてくれるかもしれない。日本語が得意でない外国人にも当てはまると思います」

*合理的配慮

2006年12月国連総会で採択された障害者権利条約の第2条では、「障害者が他の者との平等を基礎として全ての人権及び基本的自由を享有し、又は行使することを確保するための必要かつ適当な変更及び調整であって、特定の場合において必要とされるもの」であり、かつ、均衡を失した又は過度の負担を課さないものとしている。

*障害者差別解消法（障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律）

全ての国民が、障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に向け、障害を理由とする差別の解消を推進することを目的に制定された法律。2013年6月制定。

一般社団法人tenten 藤本 菜月さん・真部 さとみさん

「転勤族の女性とともに」

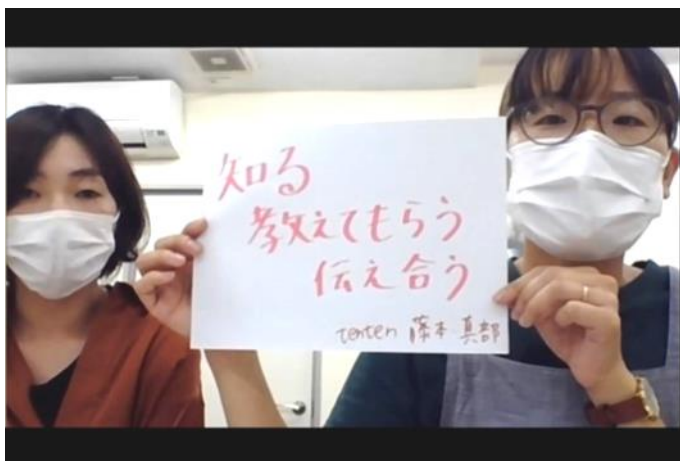
一般社団法人tentenの藤本菜月さん(代表)と真部さとみさん(メンバー)は、福島県で家族の転勤のため転入してきた女性を応援する活動をしています。仲間や地域とつながるきっかけづくりのための座談会やワークショップ、在宅でもできる仕事づくり、暮らしの情報発信、福島の暮らしの中で生まれた作品や食品を販売するショップの運営などを行っています。転勤族の妻という立場で、地域で暮らすことについて聞いていきます。

ー 転勤してきて、孤立を感じましたか？

藤本「夫の転勤によって引越をした初めての地で、友だちがいない、知り合いもいない、地域の人と関わりたくてもどこにいったら地域の人と関われるのかも分からず、孤立感を感じました。仕事をしたいと思っていましたが、また数年したら転勤があると言われたため仕事もできないと思いました。夫の転勤によって急にマイノリティになりました」

災害時に大事なキーワード

「知る、教えてもらう、伝え合う」



一般社団法人tenten 代表理事 藤本菜月(右) 真部さとみ(左)

一般社団法人tenten代表。結婚を機に仕事を退職し、福島県へ移住。福島県職員の夫についてこれまで県内4カ所で生活する転勤族妻であり2児の母親。趣味は書道、刻字。真部さん(左)は東日本大震災時に夫の転勤で多賀城在住(H21～23年)。



藤本「転勤族は新しく住む土地のことをほとんど知りません。まずはどういったところが被災しやすいのか。どこが水に浸かりやすいのか。防災だけではなく、冬場にどこが凍りやすいのかなど地元の人に教えてもらうこと、そして教えてもらったことを新しく来た人に伝えていくことが大切だと感じました」

一真部さんは、東日本大震災時は多賀城に住んでいたとのことでしたが、そこで直面した困りごとなどはありましたか？

真部「東日本大震災時は、夫の転勤で多賀城に住んで2年目でした。震災当日はたまたま夫が仕事を休んでいて、夫の判断で避難したため、被害はありませんでしたが、同じく多賀城に住んでいた友人は、ちょうど子どもがお昼寝の時間でそこからどうしていいのか分からず、市役所に向かっていく途中のアパートの2階に避難したそうです。自分も夫がいなければどうしていいのか分かりませんでした」

一 日常からの取り組み、災害時の備えについてどう思いますか？

藤本「宮城県も福島県も災害が多いです。今年の2月（2021年）にも大きな地震があり、2年前には台風19号の豪雨で福島県も被害がありました」

藤本「そのたびにいつも思うのは、もっと日常から考えておけばよかった、ということ。思ったときに備えておくことが大切です。どういう備えが必要かを団体の座談会（月1回開催）で新しく来た人にも伝え合うことが大事だと思っています。台風19号のときに、避難所に避難した人に「どのタイミングで避難したのか」「車で行ったのか、歩いて行ったのか」「何を持って行ったのか」「行ってから後悔したことはあるか」などを聞いて、記事にしてWebで発信しています。県の防災講座に団体として申込みをして、新しく転入された人と一緒に受講することで、日常からの備えを考えるきっかけづくりを行っています」

NPO法人筋強直性ジストロフィー患者会 副理事長 佐藤美奈子さん

「車いす生活になって」

佐藤美奈子さんは、筋強直性ジストロフィー患者で、多賀城で車いす生活をしています。病気を発症したのは20年前、10年前の東日本大震災時から症状が進んでいき、まっすぐ歩くことが困難となり、その年に仕事を辞めたそうです。それまでは子育てをして、仕事をして、健常者として生活してきたのが一転、障害者としての生活が始まりました。病気のことや立場が変わって防災や地域とのつながりについての想いについて聞いていきます。

一 障害、団体についておしえてください。

佐藤「筋強直性ジストロフィーの患者は、10万人中7～10人の患者がいて、日本の患者数は10,000人～12,000人くらいいます。筋強直性ジストロフィーという病気は8～13種類あります。1割の人が先天性で発症しています。患者団体がなかったもので、ないならつくろうと活動を始めました。活動内容は、社会的認知度の低い病気を広めていくこと。この病気は治療薬も治療法もない。しかし困っている人が一定数いる。世界でも患者会が活動しています。治療方法がないなら仕方がないとはいきません。なにかできることがあるか、先生方の役に立つように、また、患者の生活の質を向上するための情報提供などの活動も行っています」

災害時に大事なキーワード

「備える」「話し合う」「考える」「動く」

佐藤「その命をつなぐために、その人に必要な備えは何だろうかということ。35年前に8.5水害がありました。その当時、妊娠していましたが、床上90cmの被害を受けました。その3～4年後にまた水害にあいました。その時は子どもも大き



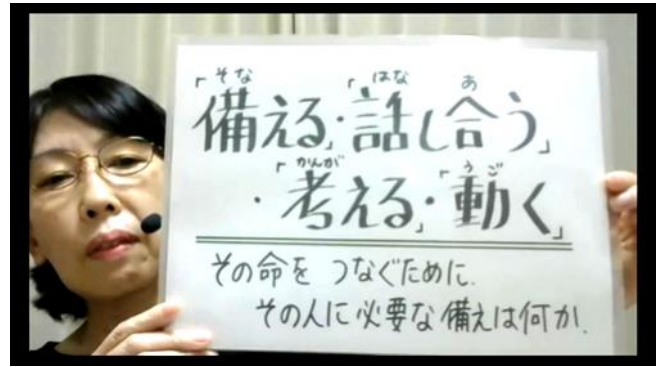
NPO法人筋強直性ジストロフィー患者会（DM-family）
副理事長 佐藤 美奈子（右上）

指定難病である筋強直性ジストロフィー患者。発症は20年ほど前だが、身体にあきらかな異変を感じたのは東日本大震災の数年前で、震災を契機として症状が悪化し2011年暮れに仕事を退職。確定診断を受け、インターネットで病気の情報を探す中で知り合った同病の患者や家族とともに、2016年に患者会を設立。以後、副理事長として活動している。

くなってきていたので、家族の中で水が来そうだったらどうするかを決めていました。畳をあげて、その上に大切なものをあげようという役割分担の話をしながら夕食を食べていたら、また浸水するという経験をしました。気持ちを備えるということが大切だと感じました」

— ご自身に変化があり、同じ避難でも状況が変わってきていると思いますが、備え方も変わってきていますか？

佐藤「自分の状況が変わってきたことで考え方も変わりました。子どもが小さいときは子どものこと、町内会の役に付いているときは町内会の人たちのことも考えていました。今は自分以外の誰かを守らなければいけないというのは〈自分の命が助かってから〉と思うようになりました。震災前に、防災用品を備えて、すぐに持ち出せるように1階に置いていました。震災の時、津波が140cmくらい自宅に上がってきました。自分は仕事で不在、夫は家にいました。自宅前の道路は車でいっぱい、車で避難はできません。車いすの同居の母親と息子を連れての避難で防災用品を持ち出すことはできませんでした。備えは必要だけれども、万全ということはありませんでした。震災で、通帳や印鑑がなくなっても、その後どうにかりました。まず、逃げられるのであれば逃げる。逃げられない状況であれば、覚悟を決めて自宅の2階に上がる。自宅の2階にまで水が上がることを想定して脚立を上げておくなど、備えを年々変えていかなければなりません。家族とは話し合って、話し合ったことを共有していますが、町内会や家族以外の人とコミュニケーションを取る機会がないため、なんとかしなければいけないと考えています」



— 佐藤さんが車いすの生活になって初めて避難経路を車いすですぐに通った時に、ベビーカーを使う子連れの人にも共通する困難だと感じたと言っていましたね。

佐藤「相手の立場に立って考えることはとても難しいため、考えるときに大事なものは想像力。ここまで考えたけれども、合っているかどうか不安なときは、相手に聞いてみることも大事なのではないかと思います」

高校生「その人の命をつなぐため何ができるのか。その人のためになにができるのが本当に大切なこと。防災の勉強をしているが、その大切なところが抜けてしまっていたりする。あらためて大切だと実感しました」

佐藤「以前は階段を上り下りできたが、今はできません。新たな備えが必要と感じています」

高校生「手助けはどういう時に必要になるのかを周囲に知らせることもすごく大切なことだと思います」

ユニバー株式会社ソーイング事業部仙台工場 ミャンマー人技能実習生

「外国人として地域に思うこと」

トーザーリンさん、キンチョーユインさん、サーチーソーさんは多賀城にあるカーテンの縫製工場で技能実習生として働き、多賀城で暮らしています。家族が日本にいないと、他の技能実習生と生活する中、地震や災害についての不安や地域とのつながりについて聞いていきます。

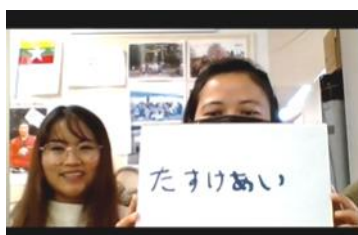
— ミャンマーは地震や水害はありますか？

リン「地震はあまりないが、水害はあります。東日本大震災の様子はミャンマーにいたときにテレビで見たことがあり、知っていました」

災害時に大事なキーワード

「たすけあい」

ユイン「ミャンマーは〈たすけて〉と言うと人がたくさん人が集まってきて助けてくれるが、日本ではそんなに人が集まらなと感じています」



ユニバー株式会社ソーイング事業部仙台工場 技能実習生
キンチョーユイン(中央) サーチーソー(左)

トーザーリン(下)

ミャンマー人の技能実習生。多賀城市内にあるユニバー株式会社ソーイング事業部仙台工場にてカーテンの縫製の仕事をしている。他の技能実習生と共に多賀城で暮らしている。

「LGBTの困りごとだけではない」

佐藤夏色さんはてんでん宮城で性的マイノリティや多様な性を生きる人々の生きづらさを解消するための活動をしています。東日本大震災で被災し、避難やボランティアも体験しました。性的マイノリティの人が避難所で生活すること、佐藤さん自身の防災への想いについて聞いていきます。

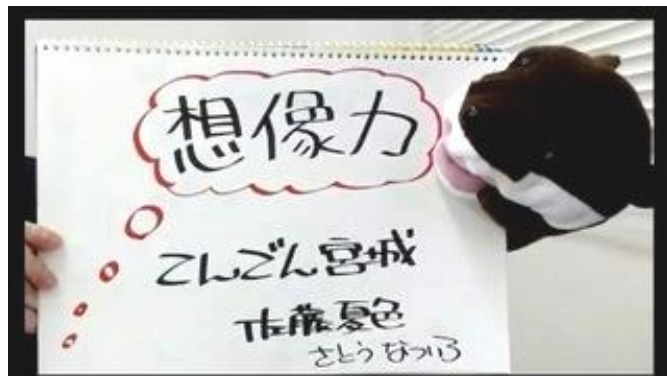
佐藤「災害時、多賀城市にいました。学校に迎えが来るまで家に帰れない子どもにも出会ったし、赤ちゃんを連れて給水所を探す人にも出会いました。3～4日目にイライラしてものに八つ当たりをはじめた自分にも驚きました。それまで想像したこともありませんでした。常日頃から防災のことなど話していたら、こんなことはなかったのかなと思いました」

災害時に大事なキーワード

「想像力」

ー「想像力」が大事ですね。

佐藤「〈こうしてほしい〉〈ああしてほしい〉ではなく、まずは自分のことをどうやって守るか、を考えるようになりました。それから地域に困っている人はいないか、という順番です。LGBTの困りごととは自分で守ったほうが、早い。プライバシーも守られます。自分はLGBTの困りごとだけで困っているわけではありません。今は、大勢の人と会うのが苦手なため、避難所生活は難しいと感じました」



てんでん宮城 代表 佐藤 夏色

東日本大震災で、性的マイノリティの生きづらさや支援の困難さを感じた。自分達の事は自分達でやらなければならないと思い、性的マイノリティや多様な性を生きる人々の生きづらさを解消を目的とし2013年に活動を開始。当事者同士の交流の場の提供・社会への提言を進めている。誰かを守るため、自分を守るため、それぞれの生きやすさを見つけれよう活動している。

佐藤「知ってもらうために活動していますが、知られると困る人も多いです。自分も知られたくないから顔を出さずに活動しています。知って欲しいという想いと、知ってほしくないという想いの間で活動しているのが現状です」

■TSR2021参加者の感想（アンケート一部抜粋）

- ・TSR2021発のキャンペーンとして、「人様に迷惑かけよう！他人の迷惑に寛容になろう！」キャンペーンを多賀城市全体で展開したいです！自分と違う、手助けがないと生きられない人たちが、生きづらさを感じている人たちのことを知ることができれば、感じ方が変わったり、想像力がさらに働くようになって、その後の行動が変わる人たちが増えます。そんな寛容な人が増えれば、多様性を許容できるインクルーシブなまちになると思います。それは、災害時にも真にレジリエンスなまちにつながります。
- ・防災にマイノリティの視点を取り入れるというテーマから、本気で誰一人取り残さない地域をつくらうという熱意が伝わりました。2回目の参加ですが、前回同様、多賀城には色々な方がいるのだなと感じました。皆仙台の方に行ってしまうせいか、街の中心と呼べる場所がないせいか、どんな人があるのかがあまり見えないのが多賀城というまちの特徴なのかという気がしていましたが、TSR会議はそういう人々をつなぐ貴重な場になっていると思います。
- ・転勤、障害、外国人、一緒にする企画がすごいとモリス先生がおっしゃいましたが、様々な環境の方の困りごとを一緒に考えることも良い取り組みだと思いました。
- ・避難所で急に外国人の方に会ったときにアタフタしないように、常日頃から近所さんや散歩のときに会った方にこちらから声をかけようと思いました。このご時世、難しいけれど普段からの関係(つながり)が一番だと思いました。
- ・日常から他者や地域とつながる事が、防災の助けになるという事が理解できました。まずは他者を知ること。誰もがふらっと気軽に参加できる場所やイベントがあるとよいのかもと思いました。たまにはご飯でも一緒に食べながらお話を。会社と家庭以外の新空間。コロナ渦では夢のようですが…。参加者の皆さんも繋がりたいという思いは一緒のように感じました。
- ・震災の経験を人に話す事は大切とあらためて感じました。
- ・簡単に問題を解決できるとは思いませんが、それに向かって行動する生き方や、悩み事を人に話す(放す)ことで苦しい事が少しは楽になると思うので、ぜひそういった機会が身近にたくさんあればと感じます。
- ・私自身は、外国人との多文化共生事業に関わり始めたばかりで、外国人が必要としていることと、我々日本人が、外国人が必要としていると思っていることが違っているかもしれないという気づきになりました。



ゲストを交えた3グループに分かれてアイデア出しのグループセッションを行いました。

一部抜粋して紹介

A

障害者（ことば）× 外国人 神 桂子さん × 外国人技能実習生のみなさん

「みんなに伝わる情報の伝え方のアイデア」

障害の特性によって聴覚や視覚から得る情報を取得することが難しい人や外国人で日本語が不得意な人もいます。仕事や旅行の地でたまたま災害に遭った人は情報が入ってきても理解が難しいかもしれません。小さな子どもや介護が必要な人の付き添いをしている人は情報取得が後回しになっていることもあるかもしれません。

避難所で、紙やボードで情報を伝えることは、聴覚障害のある人だけではなく、発達障害のある人や聞き逃してしまった人にとってもいいこと。日本語での会話はできるが、文字が読めない外国人もいる。

いきなり「助けて」と言われても、それは同じ日本人同士でも難しい。災害や大事な場面で関係性が発揮できるように普段から交流を持って置くことが大事。

B

LGBT × 外国人 佐藤夏色さん×J.F.モリスさん

「見た目では判断できない人たちをどう配慮すべきか」

性的マイノリティの人や見た目は外国人だけれども日本語が得意で日本人と変わらず日本語が使える人、見た目では障害のあることが分からない人など一見では分からない人たちもいます。自分たちが持っている勝手な思い込みで傷つく人や困る人がいるかもしれません。

性的マイノリティも見た目と中身が異なる。それを人に話すか、話さないか。話したいのか、話したくないのか、について活動しているが、人は第一印象、見た目を重視するため難しい。

話す必要がある場面かどうかで決まるのではないと思う。一番意識しているのは自分自身ということを受け入れると別の世界が見えてくるのではないか。

外国人や性的マイノリティの人も同じ人間、最低限必要なことは変わらないと思う。外国人や性的マイノリティの人の障害があるかもしれないが、理解を進めることは大事。互いを尊重していくことが大事なのではないか。

C

転勤族×障害者（車いす） 藤本菜月さん×佐藤美奈子さん

「地域との関係性が少ない人たちとどうつながるか」

転勤族や障害のある人、日中仕事をしている人など普段地域の行事に参加できず、顔を合わせる機会が少ないため地域との関係性が少ない人たちがいます。転勤族は自分や家族の転勤で急に住む場所が変わることになります。障害も生まれつきではなく、突然障害者になることもあります。

町内会に入っていない状態で避難所に行ってもいいのか、と悩んで行けなかったことがあった。町内会に入るにしても、誰も知らない土地、期間限定で住んでいる状態で町内会に入って何をやるのだろうという思いがある。昔ながらの住宅地の町内会に入るのは疎外感がある。

自分は引越をした際に町内会に最初は入らなかったが、隣近所とおすそ分けをしながら顔見知りになって、何かあったときにすぐに交流できるようにしておいた。団体に所属したからつながるわけではなく、隣近所の人とつながって情報共有することを大事に生活している。

多賀城でこれからできることー。

ゲストのみなさんから全体を通してあらためて「多賀城でこれからできること」や感想などを伺いました。また当日はZ o o m（オンライン）での開催でしたが、参加者のみなさんからのチャットやアンケートから、たくさんのアイデアや自分にもできることなどを共有していただきましたのでご紹介します。

「てんでん宮城の佐藤さんがお話していた**“想像力”**をつなぐものは**“知ること”**。想像することは自分の経験や知っている範囲内から推測・類測するしかないため非常に難しい。このような取り組みをもっとやって欲しいという声がいいろいろなところから出てきていることを互いに認識できたことが大切なこと」

J. F.モリスさん

（宮城学院女子大学名誉教授／東北大学災害科学国際研究所特任教授）

「防災や災害時について、**具体的なことを考える**ワークショップが必要と思いました。その中で自分たちができる役割を（フードバンクとして）考えてみたいですね。支援要請と配達・ケアなど」

フードバンク関係者

「一見違うように見えるゲストの**困りごとをちょっとずつつなげていけたら**と思う。モリスさんがお話された**“インクルーシブ”**“インクルージョン”包括的の考え方に持っていければと思う」

佐藤夏色さん（てんでん宮城 代表）

「この後の交流会では、車いすユーザーの方や自治会役員の方も参加し、車いすユーザーにとっても同じように不便を感じている点などの共通点が話にでました。障害のある私たちから**お互いさま**って言えるような地域になれるといいなという感想もありました。ほかに防災視点で要支援者である自分たちは、地域で忘れられていないか、本当に声がけしてくれるのだろうかという切実なお話もありました。東日本大震災では視覚障害者の方の被害も多かったとのことでした。今一度、一緒にまちに暮らす人たちのことを考えるきっかけになるとよいと思います」

「防災訓練で集合する公園は2mの津波浸水区域のため自分には行かない。何か良いアイデアはないか？ すぐにアイデアは出てこないが、課題があるということはこれからも防災について考えていかないといけない。**備えも年々変えていかないといけない**。〈車いすです避難してみよう〉車いすユーザーだけではなく、ベビーカーユーザーも参加し、“ここは見た目は分からないけれど、こんなに段差があるんだね”などの気付きも提言していければと思う」

佐藤美奈子さん

（NPO法人筋強直性ジストロフィー患者会 副理事長）

「シルバーさんの協力を得ながらまち歩きを定期的 to 実施してはどうでしょう。また、年齢に応じて紙媒体やSNSを活用した情報発信を相互にできれば良いかと思ひます。〈迷惑かけちゃダメ〉撲滅キャンペーンとか。〈他人に迷惑をかけちゃいけない〉から**他人の迷惑に寛容になろう**〉キャンペーンとか。多賀城市で展開したら、避難所で大きな声をあげてしまう自閉症の方、食べ物のアレルギーのある方、周囲の手伝いがないと生活ができない方もオッケー、なインクルーシブなまちになるかも!? 避難する当初から〈福祉避難所〉が利用できるシステムを整えてほしいと思ひます」



「地域の防災イベントに積極的に参加する。当事業所は障害者の通所施設なので、利用者さんにも一緒に参加してもらい、利用者さんに地域を知ってもらう/地域の方に利用者さんを知ってもらう。また、日ごろからの勉強会。想像力を養う。いざという時、合理的配慮が必要な方へ**何ができるかを考え続ける**」

「地域や人との日常的なつながりの大切さを話す方が多く、介護福祉課主催の〈住民主体の地域づくりを広げる事業（お宝発表会）〉を広げていくことが必要だと再確認。今ある横のつながりを見える化して、まずはお近づきになる、次にネットワークをつなぐ、そして**つながりを太くして同じ目標に向かう**、ということ意識的にしていきたい」

「防災は大切。今日覚えたことを一緒に生活している寮のみんなに伝えていきたいと思う」

サーチーソーさん

(ユニベール株式会社 外国人技能実習生)

「小さなことですが、**近所の方と触れ合うこと**がまずできることだと思いました。避難所で急に外国人の方に会ったときに焦らないよう、常日頃からお近所さんや散歩のときに会った方にこちらから声をかけようと思いました。やはり、普段の関係(つながり)が一番だと思いました。一つの話題にいろんな意見が出てきてそれに対して納得することもあればできないこともあり議論というものの難しさを改めて感じました。震災の経験を人に話す事は大切とあらためて感じました」

「最近垂直避難と言われるが、がっちりとした建物ならばいいが、土砂災害で潰れてしまったり、孤立してしまったりするケースもある。また、避難物資は避難所にしかないため、自宅に備えている方は垂直避難でもいいかもしれないが、備えていない方は避難所に行って安定した物資をもらうことが大事だと思う。学校の体育館が避難所に指定されていることもあるが、教室を開放してもらえれば、騒いでしまう子どもたちやLGBTの方たちなどにも避難所が安心していられる場所になっていきやすくなるかもしれない。避難指示が出ても、“この前大丈夫だったから行かないわ”と言っていると本番が来ってしまう。特に子どもや高齢者、障害のある方は早めに避難しないと間に合わない。**空振りを恐れずに避難することが大切。**」

【ホワイトボードを活用】避難所で、聴覚障害のある方やアナウンスを聞き逃した方なども情報がホワイトボードに書いてあると確認しやすくなる。

【避難所の勉強会をしよう】市役所の職員の方が避難所の運営をしているが、様々な部門の方がいるため、勉強会が必要だと思います。

神桂子さん (子どものことばの教室のび塾 主宰・言語聴覚士)

ゲスト・参加者みなさんの声



「多賀城市の取り組みとして、福祉・教育・防災・まちづくり部門など様々なところで企画事業を行っているが、“多様な主体との連携”“共生社会の推進”をあらゆる部門で共通して目指している。**住んでいる方たちが主体**となった誰もが住みやすいまちづくり・地域づくりをみなさんと一緒に考えてつくっていききたいと思います」

山路恵美子さん (多賀城市総務部地域コミュニティ課)

「今回、自分の転勤族の立場を発信したいと思い参加をしたが、他のマイノリティの方々がどのような状況に置かれているのか知ることができました。地域を知ることは、**マイノリティの人たちがいることを知ることにもつながる**。福島県内各地で行っている“tenten café”という座談会を多賀城でもやりたいと思っています」

藤本菜月さん (一般社団法人tenten 代表)

「私は昨年末に仕事の関係で転居しましたが、コロナ禍で、かかりつけの病院がないことが不安のひとつですね。わが家の自閉症の子どもも、3.11の際、体育館の避難所では過ごせないと思い避難所の駐車場で、数日車中泊しました。味覚の過敏があり、頂いた物資が食べられないお子さんもいたのですが、わがままを言っていると叱られたりという声も聞こえました。海外から来た人などは特に日本人よりも**宗教上の理由で食べられないもの**が多かったりするので、避難所でのそのような配慮も難しそうです」

「みなさんの声を聞いて、みなさんと課題について話し合ったことで新たな課題を知ることができた。勉強として災害について学んできた中には無い視点があった。防災・減災は専門の人だけではなく、**みんなでやるものだ**と実感した。これからの多賀城がより良くなるために、私たち多賀城高校災害科学科が協力できることはないかなと考えている」

櫻井さん (多賀城高等学校 災害科学科3年)

「同じところに住む人たちだけでつながるのも大事。地域の近所の方とつながるのも大事。お裾分けや毎朝のあいさつをしっかりとすることで地域の人たちとつながって、**地域のことを教えていただく**ようにしたい」

真部さとみさん (一般社団法人tenten メンバー)

「寺の立場として何ができるか、ということばかり考えていましたが、基調講演を聴講して初めて**自分自身や家族が転入者として孤立しかけていること**に気づきました。まずは、自身の近所の方々との挨拶から意識しておこなっていこうと思います。僧侶としての私、一人の市民としての私、防災に関して共通しているのは、人と人との繋がりを大切にしていくことが重要だと思いました。これを機に、改めて具体的に自分が何をしていく必要があるのか、というところを考えていききたいと思います」

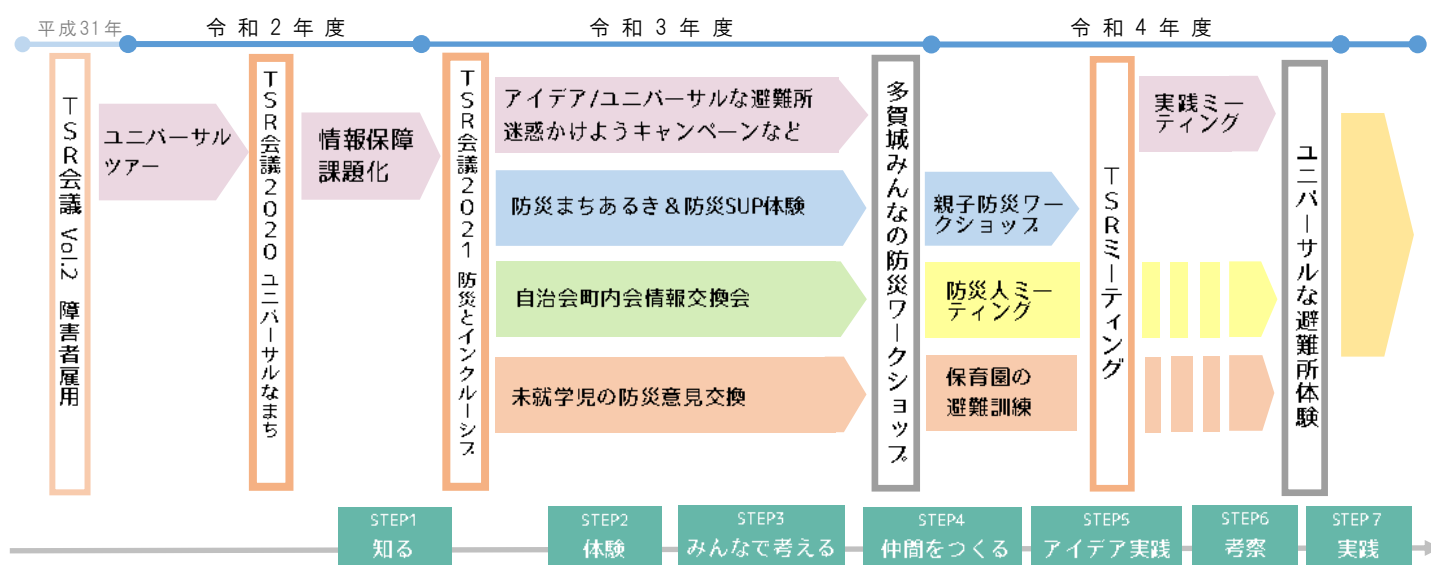
市内寺院

※肩書は2021年9月当時のもの

実施編 5. ①多賀城の防災の取り組み

だれも取り残さない地域防災を目指して

TSR会議2020で共有した「ユニバーサルなまち」に関するさまざまな課題を具体的に考える場として、TSR会議2021「防災とインクルーシブなまちを考える」を開催しました。東日本大震災時に浮き彫りになった課題のうち、いまだ解決していないと感じている当事者からの声に、市内の学識者、支援団体などと参加者が一緒に解決に向けたアイデアを出し合いました。また、まちの課題を共有し、解決のためのアイデアを出し合うだけでなく、解決に向けた具体的な動きにつながるように、実践を組み合わせ取り組みを進めました。



STEP2 体験

楽しみながら防災に触れる 水辺の防災SUP体験&ミニ防災まちあるき

多賀城高等学校災害科学科の生徒から、東日本大震災の被災状況や今も残る津波の痕跡、地域に残る伝承を聞きながらミニ防災まちあるきを行いました。障害のある人とその家族も参加。それぞれの視点で災害発生時に予想される危険な場所や、避難する際に必要になりそうなことなど、気づきを共有しながら歩きました。

水辺の防災SUP体験&ミニ防災まちあるき

日時：2021年10月31日(日)9:00～12:00

①ミニ防災まちあるき

案内人：多賀城高等学校災害科学科生徒8名

ルート：JR多賀城駅→砂押川→多賀城郵便局→

末の松山→国道45号線→砂押川

②水辺の防災SUP体験

ゲスト：太見洋介さん（NPO法人海族DMC）

参加：10名



■参加者の声

- ・わかりやすいガイドで東日本大震災をイメージすることができた。
- ・東日本大震災の被害の状況とハザードマップとを照らし合わせながら、今後の津波被害への備えを考えたい。

多賀城みんなの防災ワークショップ

NPO法人海族DMCの太見さんをゲストに、多賀城に暮らす多様なセクターの皆さんと「だれも取り残さない地域」を目指すためのアイデア出しを行いました。

STEP

1

災害時に取り残したくない人

個人で思い浮かべ、グループ内で共有

- ・ 101歳の女性
- ・ 日本語がわからない人
- ・ 小さな子どもと身近な人
- ・ 地域とのつながりが弱い人
- ・ 耳が聞こえない人
- など

STEP

2

取り残されてしまう要因

※「留学生」をテーマにしたグループを紹介

① からグループで1つテーマを選択

- ・ 日本語がわからない
- ・ 地域に知り合いがいない
- ・ 避難所がわからない
- ・ 自国の地震経験がない
- ・ どこから情報を得たらいいかわからない

STEP

3

取り残さないためのアイデア

② を解決するためのアイデア出し

- ・ 留学生の存在を知ること
- ・ 隣の人が声がけをする
- ・ ピクトグラムや絵で伝える
- ・ 地域の防災訓練に参加など



多賀城みんなの防災ワークショップ

日 時：2021年11月6日(土) 14:00~16:00

ゲスト：太見洋介さん(NPO法人海族DMC)

参 加：20名(NPO、町内会、企業、市民等)

■参加者の声

- ・ 日常のコミュニケーションの大切さ。
- ・ 情報収集の格差が広がっている中でどう周知するか。
- ・ いろいろな情報を共有すれば暮らしやすくなる。
- ・ 防災に関する実際の地域の取り組みを生の声で聞けたことが有意義だった。

太見 洋介 (NPO法人海族DMC 理事長)

1977年福島県生まれ。東日本大震災の津波で自宅全壊。勤めていた三井不動産上海を退職し2015年起業。NPO法人海族DMC理事長。侍代表取締役。太見裕介商業建築研究所代表取締役。その他、数社の代表や理事を務める。多賀城市在住。



SUP体験は、NPO法人海族DMCの太見さんをゲストに、市内中心を流れる砂押川で行いました。多賀城駅前の川面に浮かぶSUPに、土手を散歩する方々も注目していました。東日本大震災では津波が砂押川を遡上し、堤防が決壊したことによる浸水被害も起こりました。暮らしの身近にある砂押川ですが、実際に水の近くまで降りたことはない人も多かったようです。SUPを楽しみ、川に親しみながらも、川の水位に潮の満ち引きも関連していることに気づき、川の危険性や防災について学びました。



■参加者の声

- ・ SUPで水に親しみ、セルフレスキュー方法も学べた。
- ・ 仙台新港、砂押川、七北田川、貞山運河と水に囲まれたまち多賀城の特性が活かそう。
- ・ 防災のことも知りながら川を楽しむ機会が増えるとよい。



TSRミーティング「課題解決に向けた実践のためのアイデア」

これまでのTSR会議では、ユニバーサルなまちや防災に関する課題を広く知することを目的としてきました。TSR会議を通じてわたしたちの暮らすまちには解決しなければいけない多くの課題があることに気づきました。その課題の中から解決に向けたアイデア〈迷惑掛けようキャンペーン〉など多賀城で実践できることについて取り組みをカタチにしていきたいとの声も上がりました。そこで、これまでのTSR会議の参加者や防災に関心のある市民のみなさんに集まっていただき、具体的なアイデアを考えることにしました。そして、課題解決のための実践として〈ユニバーサルな避難所をつくる〉取り組みを始めました。



■TSRミーティング

これまでのTSR会議で出てきた地域や社会の課題をいくつかピックアップ。解決に向けて取り組む実践のアイデアを出し合った。

出た意見

- ・平時と災害時がつながるような取り組みが必要。
- ・車いすユーザーとベビーカーユーザーの困っていることには共通点がある。
- ・管理ではなく、対話の中でお互いにとってよい環境づくりできるとよい。

日 時：2022年7月28日(木) 15:00～16:30

参 加：9名



■ユニバーサルな避難を考える会

11月5日(土)の実践の具体的なアイデアを出し合った。避難所はフェーズによっても異なるため、フェーズも「2、3日経ったころ、余震の恐れがあるため1週間以上の避難が必要」などの細かい内容も決めた。

出た意見

- ・聴覚障害者、外国人などに向けた情報伝達が課題。
- ・「できること」を可視化できるツールがあるとよい。
- ・口腔ケアは大切。気分転換にもなる。
- ・避難所立ち上げてすぐに子どものあそび場をつくる。
- ・楽しい要素も盛り込んでできるとよい。
- ・トイレの課題がある。

日 時：2022年10月13日(木) 18:00～19:30

参 加：9名

■2回目

「だれ一人取り残さない防災の取り組み～被害を最小限にするにはどのように動くべきか～」をテーマに、これまでの情報交換会で出た話題などから「制度や仕組みづくり」「地域の取り組み」「個人の取り組み」「子どもたちへの減災教育」の4つのテーマを設定し、関心のあるテーマでグループごとに話し合いをした。課題の深掘りやアイデア出しにつながった。

出た意見

- ・SDGsと防災を関連させて考えることができる。
- ・地域住民参加による防災の実現について。
- ・マイタイムラインをつくることで、自分のできることを考えることができる。

日 時：2022年8月25日(木) 18:30～19:30

参 加：15名



■3回目

参加者が実践している取り組み、「保育所の避難訓練」や「放課後子ども教室での防災・減災ビンゴ」、当センター主催の「ユニバーサルな避難」について、情報交換や具体的なアイデア出しを行った。

出た意見

- ・学校では防災に関する知識を持つ人の情報を求めている。
- ・クロスロードゲームを多賀城でも実施してみたい。
- ・避難経路の状況を避難者に伝える先発隊を防災士が担えるのではないかな。

日 時：2022年9月16日(金) 18:30～19:30

参 加：9名



防災人ミーティング「想いとスキルを活かしたい」

防災士や防災指導員、地域の防災担当など防災に関する資格や関心の高い方＝防災人が集まり、防災に関する情報交換・共有をする防災人ミーティングを4回開催しました（プレ開催を含む）。ミーティングは、それぞれの活動に活かしたり、この場でつながった人の活動に協力したり、課題解決に向けて一緒に考え、アイデアを出し合う場を目指してきました。防災をテーマに地域に役立ちたいと思っている人材の新たな掘り起こしや、資格を地域に活かしたい方と防災の知識を必要としている教育機関とのマッチングにもつながりました。また、「ユニバーサルな避難所をつくらう」に関心のある防災人のみなさんが運営メンバーとして参画していたなど、想いとスキルを地域に活かす場となりました。



さまざまな分野で活動している防災に関心を持つ人たちが集まった

■0回目（プレ開催）

「防災士の資格を持っているが地域に活かす場がない」「地域の防災担当。他の地域はどうやっているのか」など、多賀城には防災に関心のある人たちがいるけれども、その人たちの想いやスキルを活かす場がないとの声から、まずは当センターが知っている人に声掛けをして防災人の顔の見える関係を築くために防災人ミーティングをプレ開催した。

出た意見

- ・子どもの防災は共通点にできそう。
- ・転居手続きや入学式などのタイミングで地区ごとの防災を伝えてはどうか。
- ・防災士としてLGBTの知識を持っておきたい。

日 時：2022年6月7日（火）18:00～19:00

参 加：16名

■1回目

津波新浸水域が発表されたこともあり、多賀城には防災に関心のある人が多くいること、防災に関心のある人の顔の見える関係性を築いて、いざという時に助け合えるつながりをつくるのが大切であると考え、市の広報紙や当センターのHP・ブログ、チラシなどで広報し開催した。これまで当センターと関わりのなかった人も「防災」をテーマに集まり、防災人の輪が広がった。

出た意見

- ・中学生も避難所で活躍していたので担い手になる。
- ・ゲームで楽しく防災に関することを身につける。
- ・昔の川の流れなど歴史から防災を考えることができる。

日 時：2022年7月15日（金）18:30～19:30

参 加：19名

■防災人のみなさんの感想

- ・2004年に開催した多賀城市の防災リーダー1期生。この辺りは谷地だったから水害が多いなど、それぞれの地域の人の話が印象に残っている。
- ・LGBTに関する活動をしている中、被災した当事者として話す機会があったが、震災から10年経ち機会も減ってきた。過去の話だけでなく、未来の話をしたいと思い防災士の資格をとった。
- ・自分の命を守ることで始めてほかの人の命が守られる。命を守ることを普通の会話から広めたい。
- ・災害が起こってからではなく、防災の啓発活動が重要だと思った。啓発も防災士の役割だと思っている。
- ・東日本大震災の際は防災士だったが活躍できなかったという思いがあり、役目を果たしたいと思っている。地域のネットワークを活用できればと思っている。

- ・平時のつながりがないと災害時にうごけないことを実感した。平時のつながりが大切。つながりを大切にしたい。
- ・地図を見ると地形・地層がわかり、災害の危険度もわかる。住民ひとりひとりが住んでいる地域のリスクを感じて、どうしていけばよいかを考えることが大切。
- ・避難行動については、子どもたちには大人が教えていく必要がある。親が関心を持つ必要がある。
- ・救命救急で助かる命もある。講習を定期的に地域のみなさんとやる場があるとよい。
- ・防災士とは、地域の防災リーダーの役割ではという話になった。地域の特徴に合わせて防災士に話していただけるとよいのでは。
- ・避難所が障害児を迎えにくいシステムであり、避難しても安心していられなかったということを知った。
- ・地域力を高め、さまざまな方と一緒に、避難行動がとれるようにしたい。

ユニバーサルな避難所体験

「避難所での困りごとをみんなのアイデアで解決」

市総合防災訓練に合わせ、避難所になる文化センターを会場に開催しました。避難所運営に当たる市職員や障害当事者、親子、会場周辺の町内会役員などが参加し、ユニバーサルな避難所を体験しました。「ユニバーサルな避難所体験」でアイデアを考えるとところから参加した防災人の5名のみなさんと共に実施。当事者が感じる課題を知って、解決するために考えたアイデア、そして実践を通じてわたしたちの暮らすまちにある課題に気づいてもらい、解決に向けた取り組みに一步近づくことができました。



防災バッグ展示

運営メンバーの防災バッグを展示して来場者に防災グッズを紹介。何を防災バッグに入れているのか、説明を聞きながらみなさん考えるきっかけになった。



できますゼッケン

言語、専門技術、得意なこと、自分ができていることを記入して見える化する「できますゼッケン」を作成。自分の背中とひと目で誰が何できるかわかるように会場の壁に張り出した。お互いに力を合わせて避難所運営ができる。自分にできることで、避難所で役立ちそうなことをみなさん真剣に考えていた。



点字ブロック体験

点字ブロックがない場所にも、臨時で設置できる移動式の点字ブロックを設置。もともと点字ブロックがないところでも移動式の点字ブロックがあることを知ってもらえる機会となった。



ユニバーサルな避難所 体験しませんか？

日 時：2022年11月5日(土) 10:00～11:30

会 場：多賀城市文化センター創作室

参 加：47名+企画運営として5名



ロービジョン体験

視野狭窄・白濁・盲目の3種類の見えにくさを体験できるロービジョン体験眼鏡を使って、目の不自由な人の見え方を体験。盲目の体験眼鏡と白杖を使って歩いている様子。



段ボールトイレ体験

大人が座っても安定感があることに驚いた人も多かった。段ボールトイレを採用することで、トイレの数を増やすことができ、性的マイノリティへの配慮が必要な人も安心して使ってもらえるのではないかな。



こどものあそび場 防災体験

大きなビニール袋で簡易レインコートを作る、食品用ラップを体に巻いて暖を取る、段ボールで秘密基地づくりなど身近なものでできる防災グッズを親子で体験。避難所に子どもが安心して遊べる場所があることで、子どもだけでなく家族など多くの人に良い影響がある。



STEP6 考察

ユニバーサルな避難所体験しての振り返り

「実践を通じてこれから必要なことを考えた」

運営メンバー5名とともに、実践を通じての振り返りを行いました。来場者の声などを共有する中で、ユニバーサルな避難所にするために必要なこと、できることなど「これから」についてのアイデアも出しました。

ユニバーサルな避難所 体験しませんか？

振り返り実施

日 時：2022年11月22日（火）18:00～19:30

参 加：5名（運営で参加したメンバー）

■参加者からの意見

- ・避難所開設キットに「できますゼッケン」を入れるとよいのではないかな。
- ・ユニバーサルは、みんながよい状況をつくる必要があり、実践したことで難しさもわかった。
- ・同じ障害で一括りにはできないことがある。
- ・助けてほしいことを我慢することがストレスになる。助けてという声をあげてもらいやすくなる必要がある。
- ・東日本大震災当時のことを話す来場者が多かった。あの時こうだったという教訓を次に生かすことができるのではないかな。当時のことを話すコーナーがあってもよい。

STEP2 体験

親子で防災について考えた

親子でつくろう！キラキラ光る防災バッグづくり



暗闇で光る反射シートを貼ってオリジナルの防災バッグを親子で作成しました。防災士の資格を持つアイリンプループロジェクトと地域の郵便局長から防災についてのアドバイスを聞きながら、作成した防災バッグに何を入れるかを参加者同士で話しました。親子でバッグづくりを楽しみながら、防災への理解を深める機会になりました。



親子でつくろう！キラキラ光る防災バッグづくり

日 時：2022年2月11日（金）10:00～11:00

会 場：オンライン（Zoom）

参 加：17名（保護者7名、子ども10名）

主 催：アイリンプループロジェクト

共 催：多賀城市市民活動サポートセンター

実施編 5. ②多賀城の子ども防災2021

地域と連携して守る子どものいのち 未就学児の防災

TSR会議2021「防災とインクルーシブなまちを考える」開催をきっかけに、未就学児の防災に取り組むアイリンプループプロジェクトより、東日本大震災で被害の大きかった多賀城市で未就学児のいのちを守るために地域と連携した保育所での避難訓練をしたいとの相談が寄せられました。

アイリンプループプロジェクトとは

東日本大震災で幼稚園の帰りに犠牲になった一人の子どもの教訓から、一人で避難行動をとるのが難しい未就学児の命を地域の力を合わせて解決していこうという取り組みを行っている。防災士の資格を持つ地域の郵便局長に協力してもらい、地域の見守りの輪を広げ、地域の安心につながるよう活動している。2021年に塩竈市のわだつみ保育園で防災士の資格を持つ郵便局長とともに避難訓練を実施。

1. 想いを共有「こども防災の日をつくる会」

未就学児の防災に関連する市民活動団体、自治会・町内会、行政、関心を寄せる人に当センターから声をかけ、多賀城での取り組みのキックオフとなる「こども防災の日をつくる会」を開催しました。当日は、保育所、大学、企業等も含め26名が集まりました。こども防災の日をつくる会を立ち上げた経緯、立ち上げのきっかけとなった震災の体験を聞き、塩竈市の保育所で行われた避難訓練の様子を動画で見たあと、「子どもの命を災害から守るために必要なこと」をテーマに意見交換を行いました。それぞれの立場から、気づき、想い、意見などの話をいただきました。



■参加者の意見

- ・未就学児といっても保育所と幼稚園では、設置の目的や管轄もちがうことから、避難訓練のあり方に違いがある。
- ・保育所と幼稚園を取り巻く法制度を変えることはなかなか難しいが、地域で連携することで防ぐことができるのではないかな。
- ・日本は地域資源が豊かである。防災の面で地域資源を活かしていく。
- ・東日本大震災で県内でも実践された知恵があり、応用できるのではないかな。
- ・連携するためには、お互いの事情を知ることが必要。お互いの事情を知ることによって配慮も生まれる。一方で個人情報保護の壁があり、お互いを知るのが難しい。
- ・保育所は地域の方に見守ってもらっていることがわかった。一方で知らない人とは話をしないという世の中になっている。
- ・多賀城は津波もあるが、大雨・洪水で浸水する地域もあり、垂直避難を選択することもある。
- ・震災から10年経過し、震災を体験していない方に伝えていく必要がある。
- ・日常の中で、身近なところで、できることをやっていく。



こども防災の日をつくる会

日 時：2021年11月26日（金）10:00～12:00

参 加：26名

2. まめまめ保育園の避難訓練 散歩中の被災を想定

桜木にあるまめまめ保育園で地域と連携した避難訓練を実施しました。2021年12月16日(木)、訓練に向け関係者15名が集まり、事前の打ち合わせを実施しました。散歩に出かけた先で災害にあうことを想定した訓練をしてみたいとの意見から、実際の散歩のコースをもとに、防災士の視点と市の防災担当課にも協力してもらい、避難経路を検討しました。



砂押川沿いの土手を散歩するルートへ向かう



地域の住民、防災士との顔を合わせ、ルートを確認した

訓練当日は、市社会福祉協議会、子育て支援の活動をする団体も参加しました。公園に散歩中に地震発生、津波警報が発令されたことを想定し、近くの避難場所となりうる企業と保育園を郵便局長がつなぎ、津波避難ビルである小野屋ホテルに垂直避難を体験。建物内にある避難時に利用する階段の位置を確認し、散歩用の移動車から降ろした子どもを保育士たちが背負い、3階まで上がりました。同じく津波避難ビルになっている株式会社共和電業にも立ち寄り、避難方法を確認しました。

■参加した保育士の声

- ・避難先となる企業と顔合わせを行うこともできたことで安心につながった。
- ・避難経路のブロック塀やマンホールなどの危険箇所など防災士視点でのアドバイスにも新たな気づきがあった。



近くのホテルに垂直避難する訓練を行った



狭い道幅、ブロック塀などに気を配る

まめまめ保育園の避難訓練

日 時：2021年12月20日（月）9:30～11:00

ルート：まめまめ保育園→うしちゃん多賀城緑地公園→
小野屋ホテル→株式会社共和電業

参 加：31名（保育園、NPO、郵便局、行政等）

主 催：アイリンプループロジェクト

共 催：地域の郵便局長、多賀城市市民活動サポートセンター

実施編 5. ③多賀城の子ども防災2022

基幹保育所から広がる地域とのつながり

2021年度の取り組みを受け、2022年度は市の防災担当の危機管理課が市内にある保育所に声かけを行い、保育所の避難訓練に郵便局やNPOが参加するかたちで取り組みを始めました。さらに保育所周辺の自治会・町内会にも声がけし、地域で気にかける関係が構築できるようコーディネートしています。2022年度は4つの保育所から声があがり、うち3つの保育所で避難訓練を実施しました。

避難訓練の流れ

- ・保育所へのヒアリング（基幹保育所）
- ・保育所周辺の自治会・町内会へのヒアリング
- ・保育所と周辺自治会・町内会の顔合わせ
- ・避難ルートの検討



避難訓練



ふりかえり



地域への共有



これから市内の幼保施設に取り組みを広げる

■桜木保育所「地域の人と考えた避難ルート」

散歩先で災害が起きた想定で訓練を実施。2022年に発表された新たな浸水想定を考慮した避難経路で行ってみました。事前のヒアリングで地区の方に教えてもらった、東日本大震災の被災の状況や道路の交通量などをルートに反映することができました。

日 時：2022年9月13日(火) 9:30~11:00

ルート：桜木保育所→中財公園→箱塚橋→

市営鶴ヶ谷住宅→天真小学校

参 加：園児27名 保育士8名 郵便局長7名

地 区：桜木北区町内会 桜木住宅自治会

鶴ヶ谷町内会 丸山町内会



■志引保育所「複数の避難の選択肢を持つこと」



普段の避難経路が地震による倒木により通行不可になったことを想定し、別ルートを検討しました。住宅地に位置するためブロック塀や外壁の倒壊の恐れのある道を避けて避難しました。訓練後に保育所でより安全なルートを見つけたとのことで、選択肢をいくつも知っておくことの大切さを実感する訓練になりました。

日 時：2022年10月18日(火) 9:45~10:50

ルート：志引保育所→高崎地区経由→市役所前公園

参 加：園児39名 保育士18名 郵便局長4名

地 区：志引町内会 さくら会

■八幡保育所「雨の中の避難の訓練」

東日本大震災での経験をもとに、避難先とした末の松山以外の選択肢を増やそうと訓練を実施しました。周辺の自治会・町内会の協力のもと、対岸のマンションへ垂直避難。保育所の近隣の自治会と顔の見える関係を築くことができました。雨の中での訓練となりましたが、これも良い経験となりました。

訓練日：2022年11月21日(月) 9:45~11:00

ルート：八幡保育所→舟橋→多賀城ロジュマン→

市役所前公園

参 加：園児9名 保育士7名 郵便局6名

地 区：東田中南区町内会 八幡下一町内会



■保育士の声

- ・防災士の視点で危険な場所や注意点を教えてもらい、安全な避難を考えることができた。
- ・地域の方に東日本大震災時の被災の状況を教えてもらうことで、より安全な避難経路を想定することができた。
- ・地域の方とつながりができたことにより心強く感じる。

■自治会・町内会の声

- ・地区の避難訓練に保育所にも参加してもらうなど、考えるきっかけになった。

地域への共有 取り組みまとめ

保育所と地域、顔の見える関係をつくる 保育所避難訓練の振り返りの会

2022年度に地域連携の避難訓練を実施した3保育所と地域のみなさんと避難訓練の振り返りの会を開催しました。訓練に参加した地区の人や郵便局長の他、同じ課題意識を持つ近隣の町内会や包括支援センターなどの参加もありました。志引保育所は、訓練後に地図にプロットし、新しい浸水想定MAPを重ねてみたそうです。そうすることでより安全な新しいルートを発見することができたため、今後の訓練に活かしたいとお話もありました。

2023年度、市では市の基幹保育所のほか、民間の保育園や幼稚園でも地域と連携した避難訓練を実施することを考えています。



志引保育所で作成したMAP

保育所避難訓練の振り返りの会

日 時：2023年1月24日(火)

13:00~14:30

参 加：27名

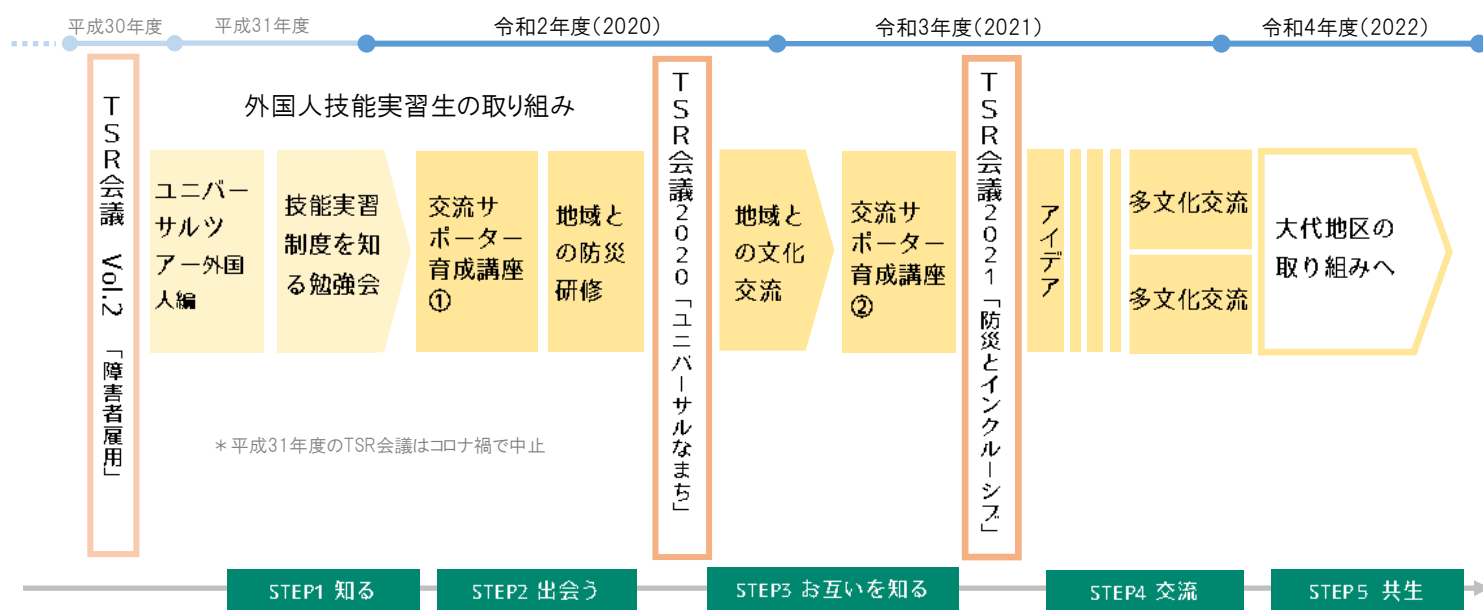
■参加者の感想や意見

- ・いろいろな想定で複数の避難ルートを持つことや垂直避難の経験などが新たな発見につながった。
- ・訓練が周辺の住民の避難の意識づけにつながった。
- ・町内会の人たちとの顔の見える関係性ができたのが良かった。
- ・想定を信じすぎず、最善を尽くすことが大切。

実施編 5. 多賀城の多文化共生2020～2021

外国人にも、だれにもやさしい地域を目指して

近年、多賀城市内に外国人技能実習生として多賀城で働き、多賀城で暮らす外国人が増えています。これまで当センターでは多賀城市国際交流協会、公益財団法人宮城県国際化協会（MIA）と連携し、2019年度に「外国人にも、だれにもやさしい地域を目指して」市内の外国人技能実習生とまちあるきや「多賀城のはたらく外国人～外国人技能実習生について知ろう～」市民公開研修を行ってきました。大代地区には食品工場や縫製工場で働く外国人技能実習生がいます。まずは大代地区で、外国人技能実習生と地域住民との交流を継続することで地域との関係性づくりを進めようと、大代地区コミュニティ推進協議会（大代地区公民館）と連携し多文化共生の地域づくりを目指してきました。



実践1年目 2020

STEP1 知る 外国人技能実習生交流サポーター育成講座

まずは、近くに住んでいる外国人を知ろう！

2回の連続講座で、地域の国際化の現状や外国人技能実習制度、「やさしい日本語」を学び、多賀城市内に多く住んでいるベトナム人とミャンマー人について知るために、県内在住のベトナム人とミャンマー人の講師からそれぞれの国の文化や言葉を教えていただきました。また大代地区でミャンマー人技能実習生を雇用しているユニバーサル株式会社の担当者毛利誠さんに技能実習生の仕事や生活についてお話をいただきました。

外国人技能実習生交流サポーター育成講座

1回目：2020年9月26日(土) 13:00～16:00 参加：21名

2回目：2020年10月3日(土) 13:30～16:00 参加：25名

会 場：大代地区公民館



主 催：公益財団法人宮城県国際化協会

共 催：大代地区コミュニティ推進協議会、多賀城市国際交流協会、多賀城市市民活動サポートセンター

町内会×技能実習生×高校生で防災研修

キーパーソンは地域で暮らす外国人

防災をテーマに外国人技能実習生と技能実習生交流サポーターを中心とした地域の人や多賀城高等学校の生徒のみなさんが「やさしい日本語」を使って交流しました。外国人が日本で災害に遭った際に必要となる防災に関する話や多賀城市の東日本大震災時の様子なども伝えられました。多賀城高等学校の生徒のみなさんからは身近なものを使って簡単にできるサバイバル飯（サバメシ）の発表がありました。最後には、参加者のみなさんとの交流会を実施し、外国人と地域の人だけではなく、地域に暮らす外国人を通じて地域の人同士の交流もできました。



防災研修

日 時：2020年11月8日(日) 13:30～16:30

会 場：大代地区公民館

参加者：72名

主 催：公益財団法人宮城県国際化協会

共 催：大代地区コミュニティ推進協議会、多賀城市国際交流協会
多賀城市市民活動サポートセンター

日本の陶芸体験＆交流会

地域の人と外国人技能実習生の交流イベントで距離が近づく！？

感染予防のため2つのグループに分かれ、順番に陶芸体験と交流を行いました。陶芸は玉づくりという、土を塊から伸ばして形を作っていく手法で行いました。みなさん、初めてとは思えない器用さで、綺麗に形を整えていました。「陶芸」という同じことに取り組むことで共通の話題ができ、話をしながら陶芸を楽しみました。陶芸をしていないグループは、技能実習生のみなさんに仕事や休日の過ごし方など質問しながら交流を行いました。研修で勉強した日本語と実際に使う日本語が違っていることや日本の好きな食べ物などさまざまな話が出ていました。



日本の陶芸体験＆交流会

日 時：2020年12月13日(日) 10:00～12:00

会 場：大代地区公民館

参加者：40名

主 催：大代地区コミュニティ推進協議会、公益財団法人宮城県国際化協会

共 催：多賀城市国際交流協会、多賀城市市民活動サポートセンター

STEP1 知る

外国人技能実習生交流サポーター育成講座

2年目も開催、交流サポーターを増やそう！

2回の連続講座、内容は1年目とほぼ同様に行いました。1年目と同じ内容にしたのは、外国人技能実習生交流サポーターを増やすため、より多くの人に地域に暮らす外国人について知ってもらうため、そして地域の多文化共生を進めるためです。2年目も新しい人が参加し、交流サポーターが増えました。

外国人技能実習生交流サポーター育成講座

1回目：2021年7月 4日(日)13:30～16:30 参加：23名

2回目：2021年7月11日(日)13:30～16:30 参加：27名

会 場：大代地区公民館



主催：公益財団法人宮城県国際化協会

共催：大代地区コミュニティ推進協議会、多賀城市国際交流協会、多賀城市市民活動サポートセンター

STEP2 出会う

実践に向けたミーティング

技能実習生も交流サポーターも同じ地域で暮らす人



1年目は主催・共催の団体がどのような交流の場がいいか企画・実施してきましたが、2年目は何人かの交流サポーターの人も加わり、アイデア出しを重ねてきました。ユニバール(株)のミャンマー人技能実習生のみなさんから直接話を聞く場も設けました。地域に暮らすみなさんが主体として多文化共生を進める地域を目指しました。

STEP3 お互いを知る

ミンガラバミーティング

まずは何事も互いを知ることから始めよう。

「ミンガラバ」はミャンマー語で「こんにちは」。
ミンガラバミーティングは6つのグループごとに「ごはん」「多賀城、日本、ミャンマーの不思議なこと」「最近失敗したこと」と、フリーなテーマで話をするというシンプルな交流会で行いました。互いの名前を知る、普通の会話をするという、当たり前のことから丁寧に行いました。

ミンガラバミーティング

日 時：2021年7月31日(土) 13:00～15:00

会 場：大代地区公民館

参 加：39名



主催：大代地区コミュニティ推進協議会 共催：多賀城市国際交流協会、公益財団法人宮城県国際化交流協会、多賀城市市民活動サポートセンター

日本のお正月あそびで 交流サポーターがみんなでつくる、みんなの場



「日本の正月あそび」をテーマに、書き初め、福笑い、カルタ、すごろく、羽根つきの代わりにバドミントンの5つのあそびを体験しました。各遊びの説明などは交流サポーターのみなさんが担当。それぞれどうやったら遊び方を上手く伝えられるか、楽しんでもらえるかを工夫しながら、技能実習生のみなさんと楽しく交流しました。「イベントに参加する」ではなく、みんなで「イベントをつくる」。自分たちが暮らす地域のことは自分たちで考えて行う、そんな地域を目指す一歩でした。

日本のお正月あそび

日 時：2022年1月10日(月・祝) 10:00～12:00

会 場：大代地区公民館

参 加：40名

主催：大代地区コミュニティ推進協議会 共催：公益財団法人宮城県国際化交流協会、多賀城市国際交流協会、多賀城市市民活動サポートセンター

そして、地域へー

2年間、大代地区コミュニティ推進協議会、多賀城市国際交流協会、公益財団法人宮城県国際化交流協会、そして当センターと市民活動団体も協力しながら多文化共生をどのように進めるか一緒に考えてきました。そして、この2年間で外国人技能実習生をサポートする交流サポーターは確実に増えて、技能実習生と地域の人との交流や理解は進んできました。今後は大代地区コミュニティ推進協議会や大代地区の人が中心に、外国人でも当たり前で暮らしていける地域を目指して、日常的な多文化共生を進めていきます。

■参加したサポーター、実習生の感想

【日本人】

- ・一緒に遊びをすることで、距離がとて近くなったと感じました。ミャンマーの皆さんが楽しそうだったのが良かった。
- ・多文化共生においてこのような事業はとても大事なことでと思います。
- ・お互いの仲を深めたり国について知ることのできるの良いと思います。
- ・実際に会わないと、地域に暮らしていることがわからないことを実感しました。
- ・お互いの理解を深めるためにも、たくさんの人が参加すると良いと思います。
- ・一方的な交流では無く、双方向の交流になれば更に良い！
- ・日本の遊びも良いですが、逆にミャンマーの事に触れてみるのも面白いと思います。
- ・外国へ行かなくても、色々な方と交流することができるので、とても良い取り組みだと思いました。コロナが落ちついたら、一緒に料理などをすると楽しいのではないかと思います。
- ・地域の方との交流会を定期的に行いたいです。
- ・集まるだけでも楽しかったです。

【ミャンマー人】

- ・日本人たちがミャンマー人に対してここまで大切に思ってくれるのは、うれしくてたまりません。
- ・日本人たちと遊ぶのが一番楽しかったです。漢字を書く(書道)のは難しかったが、とても面白かった。機会があればまた再会したいと思います。
- ・日本人の友達がたくさんできて楽しかったです。
- ・今回のような交流会を時々行ってくれたら、近所の人たちと仲良くなるのでいい機会だと思います。
- ・日本人たちと付き合えるこの交流会はとても良いと思います。また、家族のような温かさを感じられて感動しました。
- ・私が住んでいる地域の日本人たちと交流会と一緒に参加することはとてもうれしいことでした。皆様の優しさ、温かい愛情を感じました。
- ・日本人の清潔感、ルールの厳しさ、時間を大事にすることなど勉強になりました。これからも日本人たちと交流ができ、区内での活動なども一緒に協力したいと思っています。
- ・日本人と日本語で話ができて、新しい言葉もたくさん勉強出来ましたので、とてもいいと思います。
- ・日本人と交流会をすることについて参加して良かったと思いました。

6. データでみる多賀城市 ～人口動態～

■人口動態からみる多賀城市

近隣二市三町の比較(県市町村要覧から)	塩竈市	多賀城市	松島町	七ヶ浜町	利府町
人口(H31.1)	54,422人	62,485人	14,172人	18,834人	36,168人
人口(H31.1)※外国人	545人	476人	49人	77人	150人
年間観光客	2,307,499人	773,288人	3,054,759人	565,361人	1,679,551人
他市町村からの通勤・通学	10,809人	13,859人	2,619人	1,430人	7,929人
他市町村への通勤・通学	15,411人	20,384人	4,365人	7,163人	13,416人
通勤先一位	塩竈市	仙台市	松島町	仙台市	仙台市
宅地の割合	42.1%	44.0%	5.8%	30.6%	11.5%
人口密度	3,133人/km ²	3173.4人/km ²	264.6人/km ²	1427.9人/km ²	805.7人/km ²
産業割合(第一次)	1.0%	1.1%	5.2%	3.0%	1.9%
産業割合(第二次)	24.8%	20.5%	21.5%	26.8%	22.8%
産業割合(第三次)	72.7%	74.8%	72.8%	69.6%	74.0%

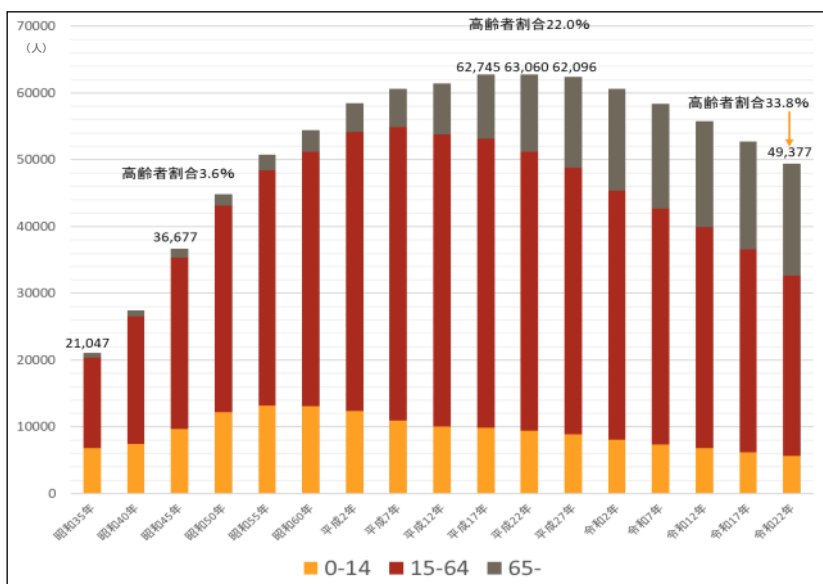
1. 多賀城ってこんなところ

多賀城市と近隣の塩竈市、松島町、七ヶ浜町、利府町の人口に関するデータを表にした。

この5つの自治体は、他市町村への通勤・通学が多く、二市三町として広域での連携も多い地域。多賀城市民の3人に1人が日中は市外に出ていることがわかる。人口密度は、多賀城市、塩竈市、七ヶ浜町とともに東北でも高い密度が特徴である。

『市町村概要みやぎ』令和元年度版より

宮城県市町村振興協会発行



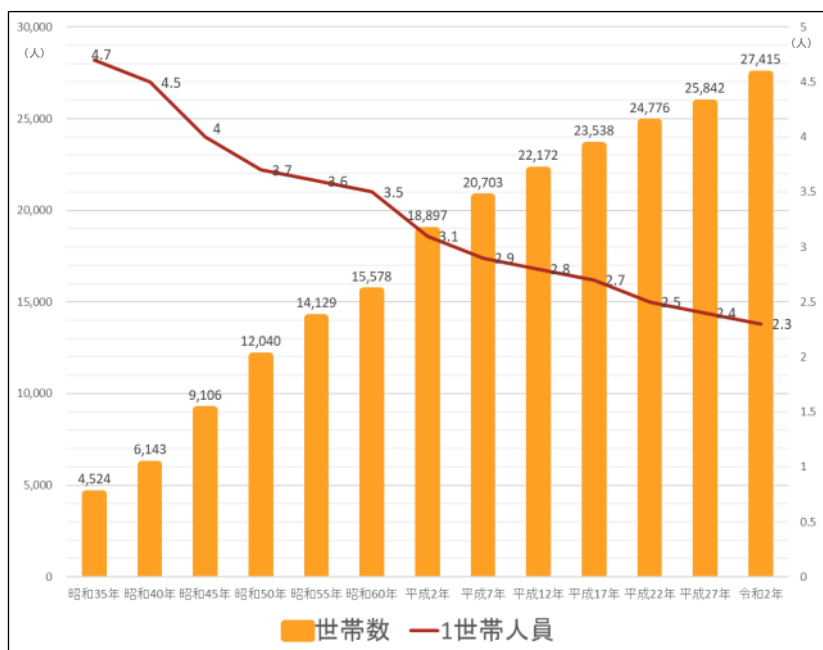
2. 多賀城市人口 年齢構成

多賀城市の人口の移り変わりとして5年ごとの年齢構成の割合をグラフ化した。

昭和45年は多賀城市が町から市になる1年前であり、当時の人口は36,677人、高年齢者割合は3.6%だった。このあたりから人口増加と高年齢者割合の増加が始まっている。人口が最大になったのは、東日本大震災前の平成22年で人口は63,060人、高年齢者割合は22.0%に増加し、その後の推計上は人口の減少に転じている。令和22年は人口が49,377人に減少するが、高年齢者割合は33.8%まで増加する見込みである。

平成27年までは国勢調査

令和2年以降は国立社会保障・人口問題研究所の推計より



3. 多賀城市世帯数と世帯人員

多賀城市の世帯数と世帯人員の5年ごとの移り変わりをグラフ化した。

世帯数の増加と反比例して世帯人員は減少し、昭和45年の世帯人口4.0人に対し、令和2年は2.3人にまで減少している。これは世帯分離や一人暮らしが増えている影響である。

平成27年までは国勢調査

令和2年は住民基本台帳より

4.多賀城市人口の社会増減

多賀城市の人口の社会増減の移り変わりをグラフ化した。

社会増減とは、転入してきた人と転出した人による人口増減のことである。オレンジ色の折れ線は転入、赤色の折れ線は転出、棒グラフは人口増減数を表している。

多賀城市は宮城県の中でも社会増減の大きな自治体である。平成23年に1,243人の人口の減少があるが、これは東日本大震災の影響によるもの。その後数年間は東日本大震災の影響による社会増減が発生している。

■移動者データからみる多賀城市

	地域名	増減数（人）	増減率（％）	平成27年人口（人）	令和2年人口（人）
	宮城県	-30,412	-1.303	2,333,899	2,303,487
1 位	仙台市	15,037	1.390	1,082,159	1,097,196
2 位	名取市	2,089	2.725	76,668	78,757
3 位	多賀城市	1,180	1.900	62,096	63,276
4 位	大和町	542	1.919	28,244	28,786
5 位	大衡村	146	2.560	5,703	5,849
6 位	女川町	98	1.547	6,334	6,432
7 位	富谷市	68	0.13181	51,591	51,659

5.宮城県内の移動者

2015年の人口と比較して増加した宮城県内7市町村の人口増減のデータを表にした。

宮城県内全35市町村のうち28市町で人口が減少した。また東日本大震災で住民の転出が相次いだ沿岸部も高い水準で減少している。

多賀城市は東日本大震災で甚大な被害を受けたにも関わらず、全体でみると3位の人口増加となっている。

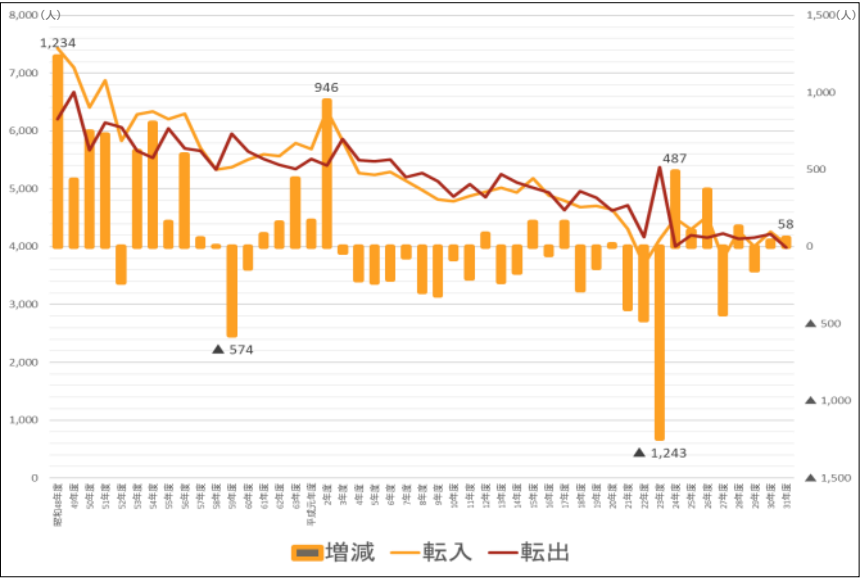
令和2年 国勢調査の速報値をまとめたもの

6.宮城県内の移動者

宮城県内の移動率が高い市町村のデータを表にした。

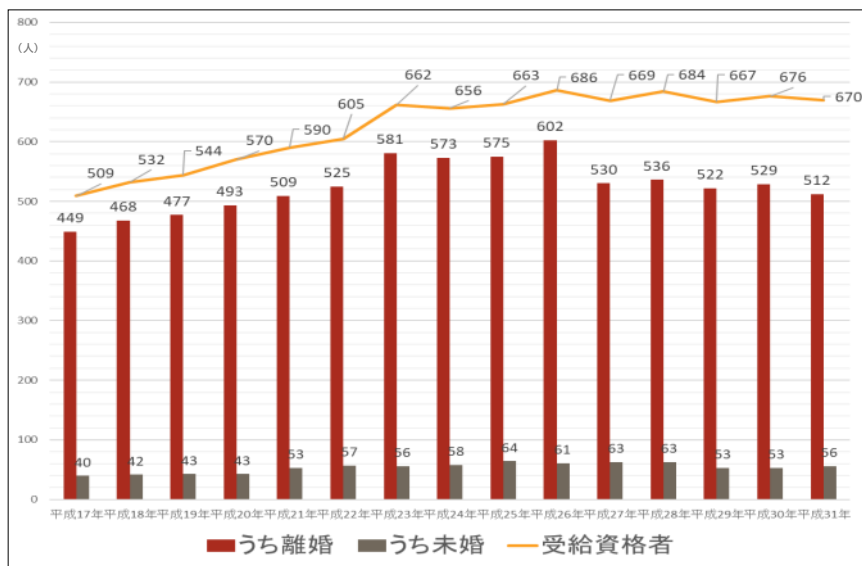
移動率とは、年間の転入・転出者を年末の人口で割って算出するもの。宮城県の統計課で出している住民基本台帳人口及び世帯数によると、多賀城市の移動率は宮城県内1位、平成28年から連続で1位となっている。

多賀城市の移動率が高い要因は、陸上自衛隊多賀城駐屯地があること、国家公務員宿舎が多数所在していること、東北学院大学のキャンパスがあることが挙げられる。



データでみる多賀城市 ～福祉～

■福祉データからみる多賀城市

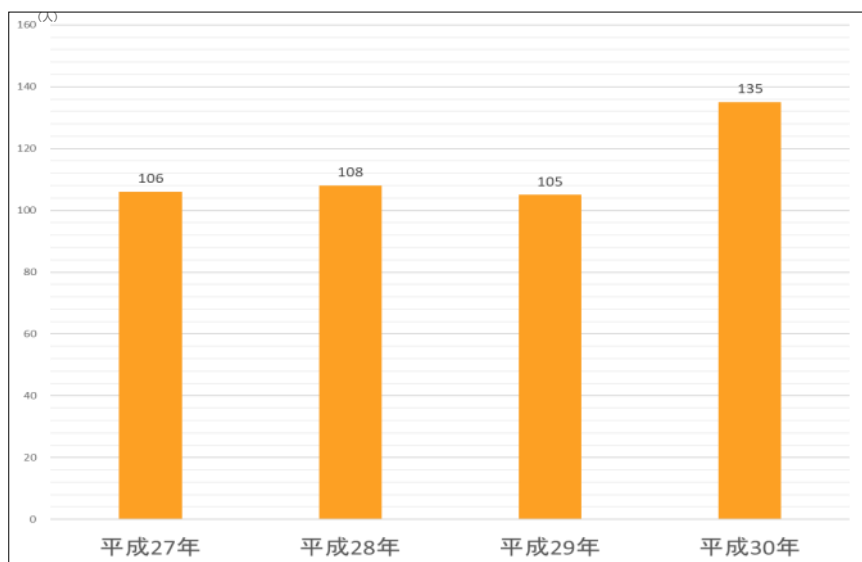


7.児童扶養手当受給者

多賀城市の児童扶養手当の受給者数の移り変わりをグラフ化した。

児童扶養手当とは、ひとり親家庭の場合で18歳までの子どもを療育している人に支給しているもの。折れ線は受給資格者数、赤色の棒グラフは離婚してひとり親家庭、灰色は未婚のひとり親家庭を表している。

18歳以下の人口は減少しているが、児童扶養手当受給者数は平成23年まで増加し、その後も600人を超えた人数で推移している。

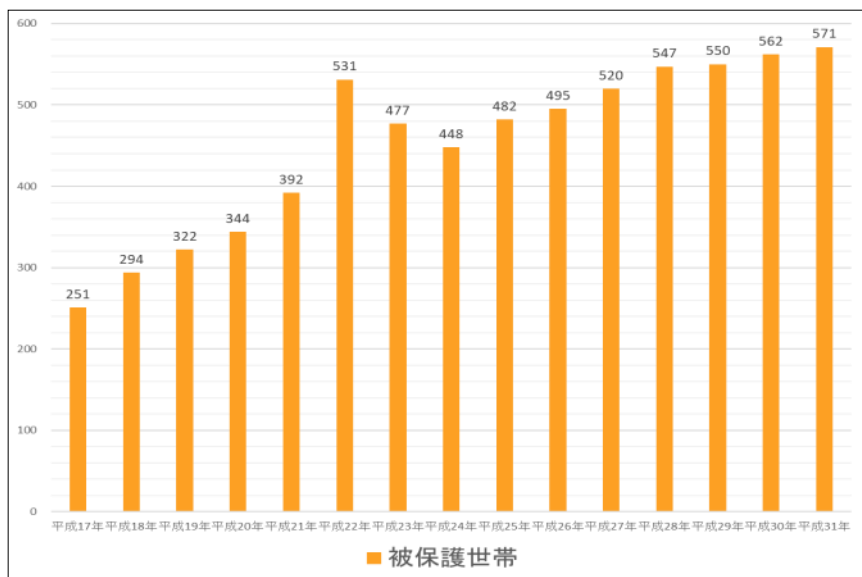


8.生活困窮者自立支援相談

多賀城市の生活困窮者自立支援相談件数の移り変わりをグラフ化した。

生活困窮者自立支援相談とは、生活保護受給者以外の生活困窮者（失業、多重債務、引きこもり、ニート、障害が疑われるもの等）に対する「第2のセーフティネット」として、保護に至る前の段階の支援を強化するもの。

平成27年度から窓口を設置し、専門の職員が伴走型の支援を行っている。相談内容としては、収入・生活費に関するものが最も多く、家族や人間関係、子育てや介護、DVや虐待、不登校などの相談も寄せられる。



9.被保護世帯

多賀城市の被保護世帯数の移り変わりをグラフ化した。

被保護世帯とは、生活保護法に基づく保護を受けている世帯のこと。本グラフについて、保護の開始と廃止が随時発生するため、4月1日時点の被保護世帯数をまとめている。ただし、平成22年以降は年度内の各月の平均値を使用している。

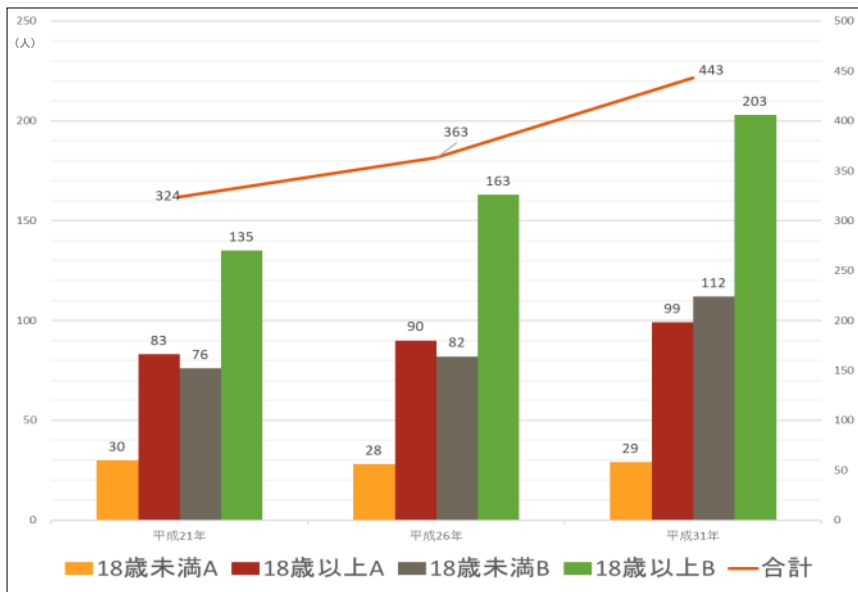
被保護世帯数は増加傾向にある。平成22年度は東日本大震災の影響により一時的に増加した。

10.療育手帳所持者

多賀城市の療育手帳所持者の5年ごとの移り変わりをグラフ化した。

療育手帳とは、知的障害者に対して一貫した支援等を行うとともに、知的障害者が各種サービスを受けやすくするために交付しているもの。折れ線は療育手帳所持者の合計数、棒グラフは障害の程度（Aが重度、Bが中度・軽度）、18歳未満・以上を表している。

療育手帳所持者の合計数は増加し、18歳以上・障害Bの増加が大きくなっている。

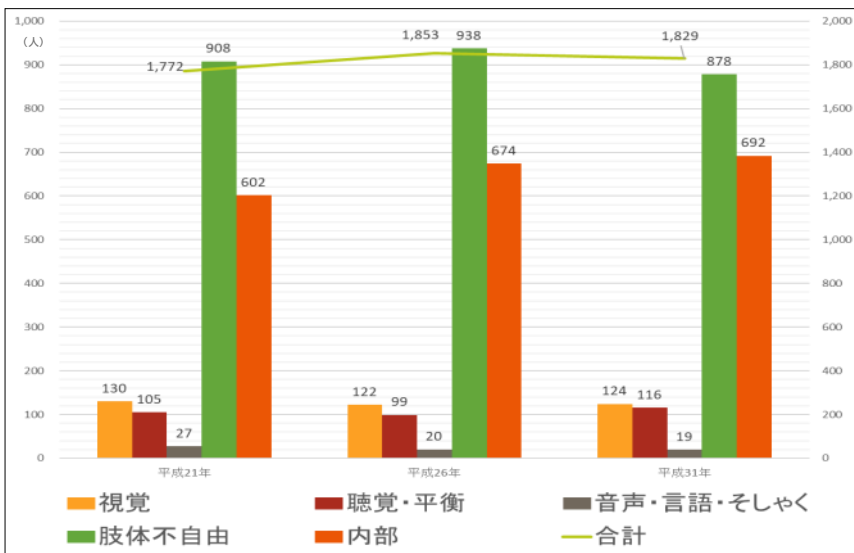


11.身体障害者手帳所持者

多賀城市の身体障害者手帳所持者の5年ごとの移り変わりをグラフ化した。

身体障害者手帳とは、視覚、聴覚、平衡、音声、言語機能及び内部機能に障害のある人と肢体不自由の人に交付しているもの。折れ線は身体障害者手帳所持者の合計数、棒グラフは障害の区分ごとの数で、左から視覚、聴覚・平衡、音声・言語・そしゃく、肢体不自由、内部の順になっている。

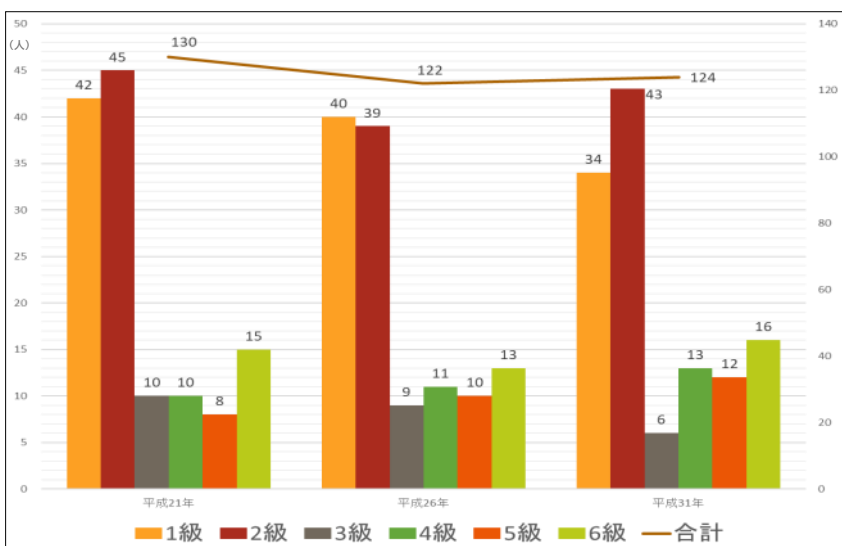
肢体不自由、内部の割合が大きくなっている。



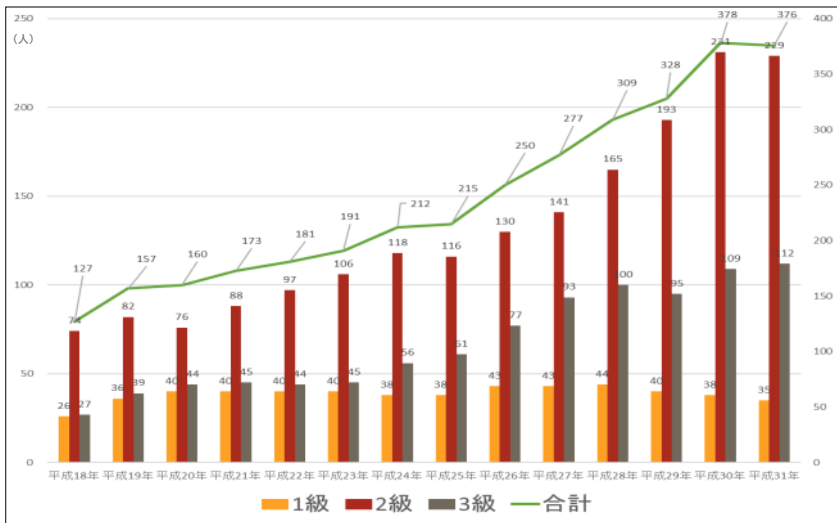
12.視覚障害者

多賀城市の身体障害者手帳所持者のうち視覚障害者の級別の移り変わりをグラフ化した。

視覚障害者の等級は1級から6級までであり、1級が最も重度、6級が軽度となる。折れ線は視覚障害者の合計数、棒グラフは障害の程度を表している。1、2級の割合が大きくなっている。



データでみる多賀城市 ～外国人～

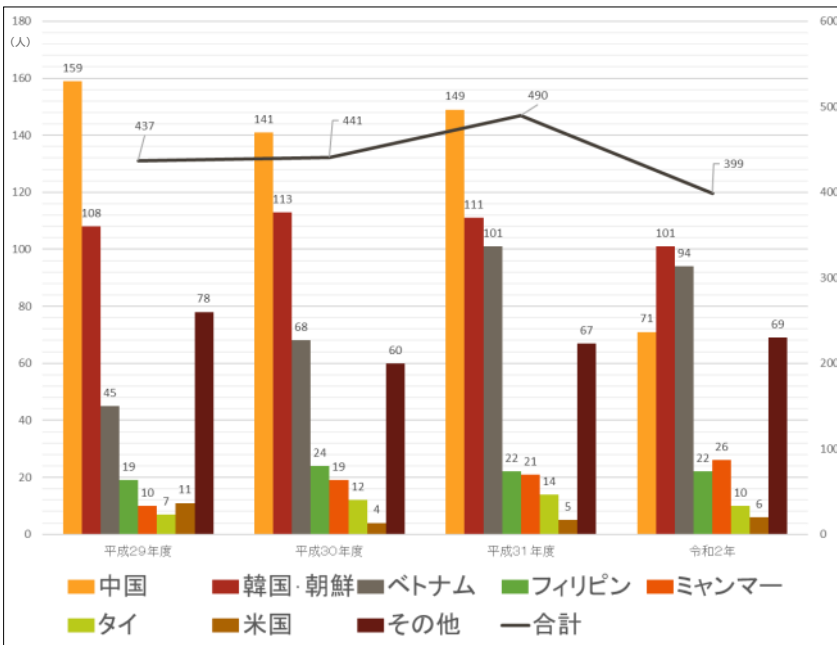


13.精神障害者保健福祉手帳所持者

多賀城市の精神障害者保健福祉手帳所持者数の移り変わりをグラフ化した。

精神障害者保健福祉手帳とは、統合失調症、精神作用物質による急性中毒又はその依存症、発達障害、精神病質・その他の精神疾患を持つ人に交付しているもの。精神障害者の等級は1級から3級までであり、1級が重度、3級が軽度となる。折れ線は精神障害者保健福祉手帳所持者の合計数、棒グラフは障害の程度を表している。精神障害者数は増加傾向になる。

■外国人データからみる多賀城市



14.国籍別外国人

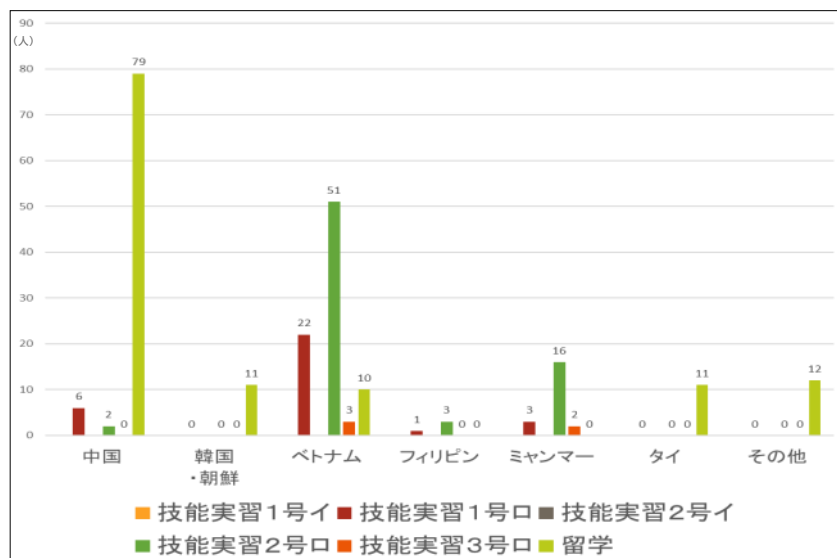
多賀城市の国籍別の外国人の移り変わりをグラフ化した。

折れ線は外国人の合計数、棒グラフは主に人数の多い中国、韓国・朝鮮、ベトナム、フィリピン、ミャンマー、米国とその他の国籍別の人数を表している。

過去4年間の推移では、これまで最も多い人数だった中国国籍の住民が令和2年度では半減し、ベトナム国籍の住民が増加している。

市民課概要データより

※毎年3月31日時点 令和2年のみ10月1日時点



15.技能実習生または留学による在留資格者

技能実習、又は留学による在留資格を持つ住民を国籍別にグラフ化した。

中国は留学生が多く、ベトナムとミャンマーは技能実習による在留資格が多くなっている。

令和2年3月31日時点

■避難所データからみる多賀城市



16.指定避難所

指定避難所とは、大規模災害（大地震、津波、洪水など）において、自宅などでの生活が困難な避難者を収容し、身体や生命の安全を確保する施設となっており、市内小中学校など12カ所ある。



17.指定緊急避難場所

指定緊急避難場所は、発災後、一時的に避難者を収容する施設。一定期間は指定避難所へ統合される。

市内に13カ所設置されているが、一部指定緊急避難場所では水害の場合、浸水により避難所として利用できない可能性が大きい避難所である。



18.一時避難所

一時避難場所（津波避難ビル）は、発災して避難が必要な場合、身の安全を確保するために一時的に避難する場所で、市内に34カ所ある。あくまで一時なので、その後は指定避難所に避難する。



Tagajo Sustainable Relationship

多賀城から、だれも取り残さない地域を目指し、

持続可能な関係性を探るための報告書 Vol.3 2020.4～2023.3

発行日 2023年(令和5年)3月31日

発行 多賀城市総務部地域コミュニティ課
多賀城市市民活動サポートセンター

編集 特定非営利活動法人 せんだい・みやぎNPOセンター
連携チーム

〒985-0873 多賀城市中央2丁目25-3

TEL 022-368-7745 mail tagajo@sapo-sen.jp